375.9
Yo19
資料室

國文活綱要

吉田彌平　小山左文二
共著

東京
共風館藏版

42587
教科書文庫
4
815
51-1925
20000
52424

資料室

教科書文庫
4
815
51-1925
2000052424

大正十四年三月七日
文部省檢定濟

吉田彌平 小山左文二
共著

國文法綱要

広島大学図書
2000052424

東京
光風館藏版

375.9
Y019

広島大学
教
52424
図書

緒言

一本書は師範學校・中學校並に高等女學校の國語科に於ける文法の教科書にする目的で、編纂したものである。

一本書は前後二篇に分ち、前篇に於て品詞に關する一般の知識を與へ、後篇に於て更にこれを補説し、進んで文章に關する知識を與へる仕組にした。

一本書は先づ平易な實例によつてその中に含まれて

ゐる文法上の法則を歸納的に教授し、更に練習問題によつて演繹的に之を應用せしめる方針を取つた。

一本書は文語を本にして口語を對照し、文語法を習得すると共に一通り口語法に通ぜしめるやうにと務めた。

一本書は用例及び練習問題の選擇に意を用ひ、各種の中等學校用國語讀本の中から、最も實用に適切な語句を採錄した。

一本書は毎章を以て二時間の教材に充て、第一時に於てはその解說を與へ、第二時に於てはこれが復習並に練習を試み、確實に教授の効果を收める方針を以て教材を按排した。

大正十三年十二月

國文法綱要

目次

前篇

第一章　總說……一頁

第二章　品詞……三

名詞　代名詞　動詞　形容詞　助動詞　副詞　接續詞

感動詞　助詞

第三章　名詞の種類……六

名詞　數詞

第四章　代名詞の種類及び用法……九

人代名詞　物代名詞

第五章　動詞の活用　その一……一三
四段活用　ら行變格活用　な行變格活用　上二段活用
下二段活用
第六章　動詞の活用　その二……一八
上一段活用　下一段活用　か行變格活用　さ行變格活用
動詞の活用の識別
第七章　動詞の形……二三
な行變格活用の動詞の形
四段活用及びら行變格活用の動詞の形
か行變格活用及びさ行變格活用の動詞の形
上二段活用及び下二段活用の動詞の形
上一段活用及び下一段活用の動詞の形
第八章　口語動詞の活用及び形……二八

口語四段活用　口語か行變格活用　口語さ行變格活用
口語上一段活用　口語下一段活用
第九章　動詞の自他……三五
自動詞　他動詞
第十章　動詞の音便……四〇
い音便　う音便　撥音便　促音便
第十一章　動詞の語尾の假名遣……四五
第十二章　形容詞の活用……四九
第一類の活用　第二類の活用　口語形容詞の活用
第十三章　形容詞の形附音便……五三
第十四章　助動詞の種類及び活用　その一……五八
時の助動詞　打消の助動詞　推量の助動詞
受身の助動詞　可能の助動詞

第十五章　助動詞の種類及び活用　その二……六四
使役の助動詞　尊敬の助動詞　指定の助動詞
詠歎の助動詞　希望の助動詞　比說の助動詞
第十六章　口語助動詞の種類及び活用……六九
時の助動詞　打消の助動詞　推量の助動詞
受身の助動詞　可能の助動詞　使役の助動詞
尊敬の助動詞　指定の助動詞　希望の助動詞
第十七章　助動詞の形……七五
第十八章　副詞の用法……七九
第十九章　接續詞の種類及び用法……八二
並列・累加の接續詞　選擇の接續詞　反意の接續詞
原因・理由の接續詞
第二十章　感動詞の種類及び用法……八五

文の首につくもの　文の末につくもの
第二十一章　助詞の種類及び用法……八八
名詞・代名詞に添はる助詞　種々の語に添はる助詞
動詞・形容詞・助動詞に添はる助詞
第二十二章　品詞の轉成……九五
轉來の名詞　轉來の代名詞　轉來の副詞　轉來の接續詞
第二十三章　語の構成　その一……九七
疊語　熟語
第二十四章　語の構成　その二……一〇三
接頭語　接尾語

後篇

第一章　動詞と助動詞との接續　その一……一〇九

動詞の未然形に續く助動詞
第二章　動詞と助動詞との接續　その二……一二四
動詞の連用形に續く助動詞
第三章　動詞と助動詞との接續　その三……一二八
動詞の終止形に續く助動詞
第四章　動詞と助動詞との接續　その四……一三一
動詞の連體形に續く助動詞　動詞の已然形に續く助動詞
第五章　助動詞相互の接續……一三五
完了助動詞と過去助動詞との重用
完了助動詞と未來助動詞との重用
完了助動詞と過去推量助動詞けむとの重用
第六章　用言と助詞との接續　その一……一三八
假定のばと確定のば　假定のとともと確定のどども

第七章　用言と助詞との接續　その二……一三四
禁止のな　禁止のな…そ　を　が　に　つゝ　ながら
て　のみ　ばかり　まで
第八章　用言と助詞との接續　その三……一四〇
並列のとと指定のと　疑問のや・か
第九章　誤り易い品詞……一四五
なの識別　なむの識別　にの識別　しの識別
ばやの　識別　は・が・を・も・や・かの識別
第十章　文の成分……一五三
主語　説明語　客語　補語　修飾語
第十一章　文の成分の排列及び省略……一六〇
常の位置　成分の倒置　成分の省略
第十二章　節……一六六

體言節　連體節　連用節　用言節　對立節
第十三章　文の構造上の分類……一七〇
單文　複文　重文
第十四章　文の性質上の分類……一七四
敍述文　疑問文　命令文　感歎文
第十五章　文の結法附係結……一八〇
終止形で結ぶもの　連體形で結ぶもの　已然形で結ぶもの
命令形で結ぶもの　助詞又は感動詞で結ぶもの

目次終

音
語
音字
意字
文字
假名
漢字

國文法綱要

前篇

第一章　總說

人の肺臟から吐き出す空氣が聲帶又は口內の諸機關に觸れて發する聲を音といひ、音によつて我が思想を外にあらはしたものを語又は言語といふ。

音をあらはす一定の符號を音字といひ、意義を示す一定の符號を意字といひ、是等を總稱して文字といふ。

◎假名は音字の一種で、漢字は意字の一種である。

文 sentence
國語 國文
口語
文語
文法
語法
單語

文字を用ひて或まとまつた思想を書き綴つたものを**文**又は**文章**といひ、一國の最多數の**人**の用ひる言語・文章をその國の**國語**・**國文**といふ。

我が國では、談話に用ひる語と文章に書く語とはやゝその形がちがふ。而して談話に用ひる語を**口語**といひ、文章に用ひる語を**文語**といふ。

口語及び文語には、それ〴〵一定の法則がある。之を**文法**といふ。

◎時として、口語の法則を**口語法**又は**語法**といひ、文語の法則を**文語法**又は**文法**といふことがある。

きれ〴〵の意味をあらはす一つ〴〵の語を**單語**といふ。

單語は

名詞　代名詞　動詞　形容詞　助動詞

品詞
名詞
代名詞
體言
動詞

副詞　接續詞　感動詞　助詞

の九種に分れる。是等の一つ〴〵を**品詞**といふ。

第二章　品詞

名詞　山　川　櫻　鶯　富士山　豐臣秀吉　學問　勉强　などのやうに、事物の名をあらはす語をいふ。

代名詞　われ　汝　彼　誰　これ　それ　こゝ　そこ　こち　そち　などのやうに、事物を指す語をいふ。

◎名詞及び代名詞は、文の主となり、題目となる。この二品詞を併せて體言といふ。

動詞　讀む　書く　消ゆ　流る　有り　居り　などのやうに、

事物の動作又は存在をあらはす語をいふ。

形容詞　白し　重し　厚し　美し　嬉し　正し　などのやうに、事物の性質・情態をあらはす語をいふ。

◎動詞及び形容詞は、名詞・代名詞について何か語る語である。動詞及び形容詞を併せて**用言**といふ。

助動詞　「書かず。」「書きぬ。」「書くべし。」「書けり。」のず　ぬ　べ　しり　などのやうに、重に動詞に添うてその意味を助ける語をいふ

副詞　「必ず來れ。」「頗るよし。」「大に喜ぶ。」「甚だ貴し。」の　必ず　頗る　大に　甚だ　などのやうに、重に動詞・形容詞などに副うてその意味を限定する語をいふ。

接續詞　「山又山。」「梅の花及び櫻の花。」「文を學び或は武を講ず。」の　又　及び　或は　などのやうに、語句のつなぎに用ひる語をいふ。

感動詞　「あな嬉し。」「やよ待て。」「悲しいかな。」「行けや、人々。」のあな　やよ　かな　や　などのやうに、物に感動したときに發する語をいふ。

助詞　「櫻の花。」「誰か知らん。」「視れども見えず。」「淺くば渉れ。」の　か　ども　ば　などのやうに、名詞・代名詞・動詞・形容詞等に添うて下の語句との關係をあらはす語をいふ。

◎助詞は助辭又はテニヲハなどといふこともある。

次の文につきて各品詞を指摘せよ。

(イ)山　青く　水　白し。

(ロ)朝日將軍　の　遺跡　は　何れ　の　處　ぞ。

(ハ)彼　は　實に　愛す　べく　し　て　狎る　べから　ず。

(ニ)學を勵み、且業を務む。
(ホ)父母の恩は山よりも高く海よりも深し。
(ヘ)嗚呼忠臣楠子の墓。
(ト)暮色は東山をこめ、叡山をめぐり、やうやう鴨川に襲ひ來れり。

第三章　名詞の種類

山　川　梅　鶯　机　硯　ビール　マッチ　などは物の名である。富士山　大井川　伊藤博文　乃木希典　などは地名・人名である。春　秋　心　夢　命　などは形のないものゝ名である。働　遊　忠　孝　運動　集會　などは事の名である。すべて事物の名をいふ語を**名詞**といふ。

◎富士山　乃木希典　のやうな地名・人名は、その山、その人に限つた名で、

固有名詞

他の山、他の人には通用せぬ。之を**固有名詞**といふことがある。

數詞

一　二　三つ　四つ　などは數量をあらはす語で、第五　六番　七つめ　などは順序をあらはす語である。かやうに數量又は順序をあらはす語を**數詞**といふ。數詞は名詞の一種である。

◎廣く數量をあらはすに　一個　二個　といひ、人の數をあらはすに　三人　四人　といひ、鳥の數をあらはすに　五羽　六羽　といひ、獸の數をあらはすに　七頭　八頭　といひ、魚の數をあらはすに　九尾　十尾　といひ、長いものの數をあらはすに　一本　二本　といひ、平たいものの數をあらはすに　三枚　四枚　といひ、二つ以上の同じものを一纏にしてあらはすに　一對　二組　三ダース　などいふのも亦數詞である。一尺　二呎　三升　四オンス　五匁　などのやうに度量衡をあらはす語、六圓　七弗　などのやうに金額をあらはす語も

亦數詞である。

次の文から名詞を擇び出せ。なほ固有名詞・數詞などがあつたらそれをも示せ。

(イ)平原十里、麥は綠に菜種は黃なり。

(ロ)須磨の海岸は、松青く、砂白く、空氣も亦淸し。

(ハ)十で神童、十五で才子、二十過ぎてはたゞの人。(ロ)

(ニ)京の五條の橋の上、大の男の辨慶は長い薙刀ふりあげて、牛若目がけて斬りかゝる。(ロ)

(ホ)金剛山を望みては楠公の義勇を仰ぎ、四條畷を顧みては小楠公の忠節を慕ふ。

(ヘ)海に面して窓に倚る客、鉛筆と紙とを手にして寫し出せるは、歌か、詩か、抑畫か。

(ト)漢字の訓は、多くの人の手を借り、多くの年月を經て漸次に定まりしものにて、一人・一代に成りしものにあらず。

人代名詞
物代名詞
人代名詞の稱
自對
對稱
他稱
不定稱

第四章　代名詞の種類及び用法

われ　汝　彼　誰　のやうに人を指す代名詞を**人代名詞**といひ、これ　それ　かれ　いづれ　のやうに事物を指し、こゝ　そこ　かしこ　いづこ　のやうに場所を指し、こち　そち　あち　いづち　のやうに方向を示す代名詞を**物代名詞**といふ。

人代名詞の稱　人代名詞は、その話す人と指される人との關係によつて、**自稱**・**對稱**・**他稱**・**不定稱**の四種に分れる。**自稱**とは　余　われ　おのれ　私　僕　のやうに話す人自らを指すもの、**對稱**とは　汝　貴君　あなた　おまへ(ロ)　のやうに相手を指すもの、**他稱**とは　彼　あれ　あの人(ロ)　のやうに自分でも相手でもない外の人を指すもの、**不定稱**とは　誰　某　どなた(ロ)　のやうに、それと

定めぬ人、又はわからぬ人を指すものをいふ。

◎自稱の　おのれ　われ　は時として對稱に用ひ、不定稱の　某　は時として自稱に用ひる。

轉用の人代名詞

◎君　卿　を對稱に、私　僕　を自稱に用ひるなどは、名詞を代名詞に轉用したのである。

複數の人代名詞

◎われ〳〵　君たち　あなたがた　かれら　などいへば、指される人が二人以上であることを示す。即ち**複數の人代名詞**である。

物代名詞の稱

物代名詞の稱　物代名詞は、話す人と指されるものとの關係によつて、之を**近稱**・**中稱**・**遠稱**・**不定稱**の四種に分ける。

近稱

近稱とは　こ　これ　こゝ　こなた（口、こちら）のやうに、近くにある事物・地位・方向を指し、

中稱

中稱とは　そ　それ　そこ　そなた（口、そちら）のやうに、稍〻離れた事物・地位・方向を指し、

遠稱

遠稱とは　か　かれ　あ

不定稱

あれ　あそこ　かしこ（口、あしこ）かなた　あなた（口、あちら）のやうに、離れてある事物・地位・方向等を指すもの、**不定稱**とは　い　づれ（口、どれ）なに　いづこ（口、どこ）いづく　いづかた（口、どちら）いづち（口、どつち）のやうに、その指す事物・地位・方向の定まらず、又は分らぬ事物・地位・方向を指すものをいふ。

物代名詞の轉用

◎こ　そ　は獨立しても用ひ、又　この　その　などのやうに助詞　の　とつゞけても用ひる。か　あ　は、　かの　あの　などのやうに、おもに助詞　の　とつゞけて用ひる。

◎こなた　こち　は自稱の人代名詞に、そこ　そなた　あなた　そち　は對稱の人代名詞に、どなた　は不定稱の人代名詞に轉用することがある。

次の文より代名詞を擇び出し、且、その種類及び稱を示せ。

(イ)これはこゝにそれはそこに、かれはかしこにそのまゝおけ。
(ロ)わが友はいづちに行きしか。かなたこなたたづぬれど見當らず。
(ハ)「汝は誰ぞ。そを何處にか負ひて行く。」「聞召せ、背負ひまつるは奴わが主と頼む乃木將軍の愛兒なり。」
(ニ)あそこに居る人はどなたですか。あれは私の兄の長男でございます。
(ホ)この美はかの美と相映じて、自然の彩色をなす。
(ヘ)明治天皇は我等國民に勅語を下し賜ひて、「朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ」とのたまへり。

第五章　動詞の活用　その一

動詞は形が色々にかはる。左の例を見よ。

飛ト
ば(あ段)…鳥飛ばず。
び(い段)…鳥飛びたり。
ぶ(う段)…鳥飛ぶ。
べ(え段)…鳥飛べり。

語幹
語尾活用

右の例の　と　のやうに變らぬ部分を語幹といひ　ば　び　ぶ　べ　のやうに變る部分を語尾といひ、その變ることを活用といふ。動詞の活用には、四段・ら行變格・な行變格・上二段・下二段・上一段・下一段・か行變格・さ行變格の九種ある。

四段活用

四段活用　語尾が五十音圖中の　あ　い　う　え　四段に活用するものをいふ。前例の　飛ぶ　がこれにあたる。咲く　推す　持つ　習ふ　讀む　賣る　漕ぐ　學ぶ　などは此の活用である。

◎此等の動詞は、その活用の行によつて、**か行四段活用・さ行四段活用**などいふ。

◎四段に活用するのは　か　さ　た　は　ま　ら　が　ば　の八行で

ある。

◎あらゆる動詞の中で、四段活用に属するものが最も多い。

ら行變格活用

ら行の四段に活用する動詞の中　有り　居り　侍り　の三語をいふ。

ら行變格活用

有ア
- ら(あ段)…望あらば言へ。
- り(い段)…天に日月あり。
- る(う段)…能ある鷹は爪をかくす。
- れ(え段)…才はあれど、德はなし。

ら行四段との異同

◎此の活用の動詞は通常のら行四段の動詞に似てゐるが、文意の切れるところに左の相違がある。

學德共に成る。る　で言ひ切る。ら行四段

善に善報あり。り　で言ひ切る。ら行變格

な行變格活用

五十音圖中な行の　あ　い　う　え　四段に活用し、且、そのう段の音に　る　れ　の添はるものをいふ。

な行變格活用

往イ
- な(あ段)…夜更くれども、往なず。
- に(い段)…夜更けて往にたり。
- ぬ(う段)…夜更けて往ぬ。
- ぬる……夜更くれども往ぬるを欲せず。
- ぬれ……夜更けて往ぬれども、敢へて留めず。
- ね(え段)…夜の更けぬうちに往ね。

◎な行變格は、う段の音に　る　れ　の添はる點が通常の四段活用とはちがふ。

◎な行變格は　死ぬ　往ぬ　の二語だけである。

上二段活用

五十音圖中　い　う　の二段に活用し、且、そのう段の音に　る　れ　の添はるものをいふ。

上二段活用

起（オ）
（き（い段）…彼は未だ起きず。
く（う段）…余は早く起く。
くる……遅く起くる事なかれ。
くれ……早く起くれば心地よし。）

生く　落つ　用ふ　試む　老ゆ　懲る　過ぐ　閉づ　亡ぶ　などは何れも此の活用である。

◎此の段に活用するは　か　た　は　ま　や　ら　が　だ　ば　の九行である。

下二段活用　五十音圖中　え　う　の二段に活用し、且、そのう段の音に　る　れ　の添はるものをいふ。

（げ（え段）…雞曉を告げぬ。
ぐ（う段）…雞曉を告ぐ。）
告（ツ）

下二段活用

（ぐる……雞の曉を告ぐる聲勇ましし。
ぐれ……雞曉を告ぐれば、必ず起く。）

得　受く　馳す　捨つ　尋ぬ　教ふ　褒む　榮ゆ　枯る　植う　投ぐ　交ず　出づ　統ぶ　等は何れも此の活用である。

◎下二段活用の動詞は五十音圖のすべての行にある。

◎得　はその語全體が變化する。

◎下二段活用の動詞の數は、四段活用の動詞に次ぐ。

次の文から動詞を擇び出し、且、その活用を示せ。

（イ）茶店あれども、客來らず。
（ロ）月落ち烏啼きて霜天に滿つ。
（ハ）かばねは朽ちて骨となり、刃は折れて霜結ぶ。
（ニ）帆を半ば張りて出で行く船あり櫓をあやつりて横ぎる船あり。
（ホ）死ぬべき時に死なずば、死ぬるにまさる恥あらん。

(ヘ)濱邊に櫂を立てゝ網を干したる漁村を左に眺め渡しつゝ、長洲に沿ひ、北に向ひて進む。

(ト)磯に碎けて折れかへる波波路の末に浮き立つ雲何物か造化の妙筆にもれん。

第六章　動詞の活用　その二

上一段活用

上一段活用　五十音圖中　い　の一段にのみ活用し、且、これにる　れ　の添はるものをいふ。

「着」
- き(い段)…帷子をきず。
- きる……帷子をきる。
- きれ……帷子をきれば涼し。

上一段活用の動詞は　着る　似る　煮る　干る　見る(顧みる)　鑑みる　試みる　惟みる)　射る　鑄る　居る　用ゐる　率ゐる

ぐらゐのものである。

◎上一段に活用するのは　か　な　は　ま　や　わ　の六行である。

◎試みる　は　試む、用ゐる　は　用ふ　ともいつて、上二段にも活用する。

下一段活用

下一段活用　五十音圖中　え　の一段にのみ活用し、且、これにる　れ　の添はるものをいふ。

「蹴」
- け(え段)…鞠をけん。
- ける……鞠をける。
- けれ……鞠をければ高く揚れり。

◎下一段活用は　蹴る　の一語だけである。

か行變格活用

か行變格活用　五十音圖中、か行の　お　い　う　三段に活用し、且、そのう段の音に　る　れ　の添はるものをいふ。

こ（お段）…秋未だこず。
き（い段）…秋きぬ。
「來」く（う段）…秋く。
くる……くる秋を待つ。
くれ……秋くれば運動界賑ふ。

◎か行變格はたゞ　來　の一語だけである。

さ行變格活用

さ行變格活用

五十音圖中、さ行の　え　い　う　三段に活用し、且、そのう段の音に　る　れ　の添はるものをいふ。

せ（え段）…善き事をせん。
し（い段）…善き事をしつ。
「爲」す（う段）…善き事をす。
する……善き事をする人かな。
すれ……善き事をすれば樂し。

動詞活用の識別法

四段活用の識別

上二段活用の識別

下二段活用の識別

◎さ行變格は　す（爲）　おはす（在す）　の二語だけである。しかし、この　す　といふ動詞は、心す　罪す　信ず　勉强す　全くす　正しくす　などのやうに、名詞・形容詞などと結びついて熟語の動詞をいくらも作る。

動詞活用の識別法　上一段・下一段の活用と變格の諸活用とは語數が少いから、その動詞を記憶することがたやすく出來る。その他の動詞は左の識別法によるがよい。

(イ)**四段活用**　書かず　言はず　のやうに、あ段の語尾に　ず　をつけて打消をあらはす。

(ロ)**上二段活用**　起きず　報いず　のやうに、い段の語尾に　ず　をつけて打消をあらはす。

(ハ)**下二段活用**　冷えず　飢ゑず　のやうに、え段の語尾に　ず

をつけて打消をあらはす。

次の文の中の動詞を擇び出し、且その活用を示せ。

(イ)子養はんとすれども、親待たず。

(ロ)今日は來な、明日來よ。

(ハ)能はざるにあらず、せざるなり。

(ニ)見渡せば、ながむれば、見れば須磨の秋。

(ホ)强者存して弱者滅び、强國榮えて弱國衰ふ。

(ヘ)秋の日は山のは近し、暮れぬまに母に見えなん、歩めわがこま。

第七章　動詞の形

動詞はその語尾の變化によつてそれ〴〵用ひかたがちがつてゐる。これを形といふ。

な行變格活用の形

未然形
連用形
終止形
連體形

な行變格活用の形

死ぬ

な（第一段）…われ將に王事に死なんとす。

に（第二段）…一門悉く王事に死に果てたり。

ぬ（第三段）…潔く王事に死ぬ。

ぬる（第四段）…王事に死ぬる武士。

ぬれ（第五段）…死ぬれば萬事休す。

ね（第六段）…潔く王事に死ね。

死な　は、事の未だ然らざることを假にいふ場合に用ひるから**未然形**といひ、死に　は、多く用言に連なる場合に用ひるから**連用形**といひ、死ぬ　は、多く文句の切れる場合に用ひるから**終止形**といひ、死ぬる　は、多く體言に連なる場合に用ひるから**連體形**といひ、死ぬれ　は、或條件の已に成立したことをいふ場合に用

已然形

命令形

ひるから**已然形**といひ、死ね　は、命令・希望の意を示すに用ひるから**命令形**といふ。

◎六形の名稱はその用ひ方の一部について便宜上名づけたもので、各形の用ひ方がこれで盡きてゐるのではない。「甲も死に、乙も死ぬ。」の死に　は連用形であるが、言ひ方を中止してゐるだけで、用言に連續せず、「死ぬべし」の　死ぬ　は　終止形であるが、終止しないで、べし　に連なつてゐるやうなものである。

四段活用及びら行變格活用の形

四段活用及びら行變格活用の形

降ル
- ら（未然）…雨將に降らんとす。
- り（連用）…雨降り注ぐ。
- る（終止）…雨降る。
- る（連體）…雨降る日。
- れ（已然）…雨降れば地固まる。

有ル
- ら（未然）…功有らば、賞せられん。
- り（連用）…功有りて賞せらる。
- り（終止）…善に善報有り。
- る（連體）…能有る鷹は爪をかくす。
- れ（已然）…功有れども、賞せられず。

（れ（命令）…雨よ降れ。　（れ（命令）…いつも元氣にて有れ。

◎四段活用の動詞は**終止形**と**連體形**とが同じ語尾で、**已然形**と**命令形**とも亦同じ語尾である。

◎ら行變格活用の動詞は**連用形**と**終止形**とが同じ語尾で、**已然形**と**命令形**とも亦同じ語尾である。

か行變格活用及びさ行變格活用の形

か行變格活用及びさ行變格活用の形

來
- こ（未然）…春はやがてこん。
- き（連用）…春きぬ。
- く（終止）…春く。
- くる（連體）…くる春を待つ。
- くれ（已然）…春くれど、花咲かず。
- こよ（命令）…春よこよ。

爲
- せ（未然）…雪合戰をせば、面白からん。
- し（連用）…雪合戰をしかく。
- す（終止）…雪合戰をす。
- する（連體）…雪合戰をする子供あり。
- すれ（已然）…雪合戰をすれば溫くなる。
- せよ（命令）…雪合戰をせよ。

◎か行・さ行の兩變格は各形ともその語尾がちがふ。命令形には何れも

よ　を含む。

上二段活用及び下二段活用の形

上二段活用及び下二段活用の形

起（オ）
- き（未然）…未だ起きず。
- き（連用）…早く起き、遅く寝ぬ。
- く（終止）…早く起く。
- くる（連體）…遅く起くる事勿れ。
- くれ（已然）…早く起くれば快し。
- きよ（命令）…早く起きよ。

始（シ）
- め（未然）…將に柔道を始めんとす。
- め（連用）…柔道を始めたり。
- む（終止）…柔道を始む。
- むる（連體）…柔道を始むる時を待てり。
- むれ（已然）…柔道を始むれば食慾進む。
- めよ（命令）…柔道を始めよ。

◎上二段活用及び下二段活用の動詞は、未然形と連用形とが同じ語尾である。又命令形にはいづれも　よ　を含む。

上一段活用及び下一段活用の形

上一段活用及び下一段活用の形

- み（未然）…花を上野にみんとす。
- み（連用）…花をみつけたり。
- け（未然）…ボールをけぬ日なし。
- け（連用）…ボールをけ出す。

「見」
- みる（終止）…花をみる。
- みる（連體）…花をみる人あり。
- みれ（已然）…花をみれば美し。
- みよ（命令）…花をみよ。

「蹴」
- ける（終止）…ボールをける。
- ける（連體）…ボールをける人あり。
- けれ（已然）…ボールをければ樂し。
- けよ（命令）…ボールをけよ。

◎上一段活用と下一段活用とは、未然形と連用形とが同じ語尾で、終止形と連體形とも亦同じ語尾である。又、命令形にはいづれも　よ　を含む。

次の文にある動詞の活用及び形を考へよ。

(イ)治にゐて亂を忘れず。
(ロ)その將を獲んにはその馬を射よ。
(ハ)來るものは拒まず、去るものは追はず。
(ニ)なせばなる、なさねばならず、なるわざをならずとすつる人のはかなさ。
(ホ)躑躅を柴に折り添へて戴きつれたる大原女も、いつしか我が友となれり。

(ヘ)花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を見る客、げふも清水觀音堂の前をみたしぬ。

(ト)人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。

次の文の誤を正せ。

(イ)約束を違ふ時は信用を失ふべし。

(ロ)何事も自らして他人に任さず。

(ハ)足の疲れるを覺えず。

(ニ)慾深くして飽くることなし。

(ホ)人の言ひ傳ふ所此の如し。

第八章　口語動詞の活用及び形

口語の動詞は文語の動詞よりその活用がよほど簡單になる。その種類も、四段・か行變格・さ行變格・上一段・下一段の五種に過ぎぬ。

口語四段活用

文語の四段・ら行變格・な行變格の活用は、口語ではすべて四段活用となる。

活用語幹	文	口	文	口	文	口
	四段		ら行變格	四段	な行變格	四段
	成		有		死	
未然	ら	ら	ら	ら	な	な
連用	り	り	り	り	に	に
終止	る	る	る。	り。	ぬ	ぬ
連體	る	る	る	る	ぬ。る。	ぬ。
已然(文)假定(口)	れ	れ	れ	れ	ぬ。れ。	ぬ。ね
命令	れ	れ	れ	れ	ね	ね

客有り。—客が有る。

死ぬる人—死ぬ人

死ぬれば—死ねば

即ち文語ら行變格の終止形　有り　は、口語では　有る　となつて四段活用に一致し、な行變格の連體形　死ぬる　は　死ぬ　となり、已然形　死ぬれ　は假定形　死ね　となつて、是亦四段活用に一致する。

◎文語動詞の已然形に當るところは、口語動詞ではすべて假定の條件を示す意味となる。よつてこれを假定形と名づける。

口語か行變格活用

文語の終止形　く　は口語では　くる　となり、命令形　こよ　は　こい　となる。

口語か行變格活用

活用＼語幹	文	口
形		
未然	こ	こ
連用	き	き
終止	く。	くる。。
連體	くる	くる
已然(文)假定(口)	くれ	くれ
命令	こよ。。	こい。。

か行變格「來」

春く。…春がくる。。

早くこよ。。…早くこい。。

口語さ行變格活用

未然形と終止形とが、文語さ行變格の動詞と少しちがふ。

即ち文語の未然形　せ　は口語では　せ　又は　し　となり、終止形　す　は　する　となる。

口語さ行變格活用

活用＼語幹	文	口
形		
未然	せ。	せ。せ。し。
連用	し	し
終止	す。	する。。
連體	する	する
已然(文)假定(口)	すれ	すれ
命令	せよ	せよ

さ行變格「爲」

外出をせず。…外出をせぬ。。しない。

外出をす。…外出をする。。

◎口語さ行變格の命令形の　せよ　を　しろ　せい　といふところもある。

口語上一段活用

口語上一段活用

文語の上一段・上二段の動詞は、口語ではすべて上一段活用になる。

活用 ＼ 語幹	文	口	文	口
	上一段「着」		上二段	上一段
未然	き	き	き	き
連用	き	き	き	き
終止	きる	きる	く	きる
連體	きる	きる	くる	きる
已然（文）假定（口）	きれ	きれ	くれ	きれ
命令	きよ	きよ	きよ	きよ

早く起く—早く起きる
起くる人—起きる人
起くれば—起きれば

即ち文語上二段活用の終止形　起く、連體形　起くる　は、口語では共に　起きる　となり、已然形　起くれ　は假定形　起きれ　となつて、全く上一段活用になる。

口語下一段活用

◎文語の終止形　起く　を口語で　起くる、連體形　起くる　已然形　起くれ　をそのまゝ　起くる　起くれ　といふ地方もあるが、普通には用ひない。

◎口語上一段の命令形を　見ろ　見い、起きろ　起きい　などいふところもあるが、普通には用ひない。

口語下一段活用

文語の下一段・下二段の動詞は、口語ではすべて下一段活用となる　左の表を見よ。

活用 ＼ 語幹	文	口	文
	下一段「蹴」		下二段
將然	け	け	け
連用	け	け	け
終止	ける	ける	く
連體	ける	ける	くる
已然（文）假定（口）	けれ	けれ	くれ
命令	けよ	けよ	けよ

数を受く—数を受ける
数を受くる人—数を受ける人
数を受くれば—数を受ければ

口	下一段	受ウ	け	け	けよ
				ける	けれ

卽ち文語下二段活用の終止形　受く　連體形　受くる　は、口語では共に　受ける　となり、已然形　受くれ　は假定形　受けれ　となつて、全く下一段活用になる。

◎文語の終止形　受く　を口語で　受くる、連體形　受くる　已然形　受くれ　をそのまゝ　受くる　受くれ　といふ地方もあるが、普通には用ひない。

◎口語下一段の命令形を　蹴ろ　蹴い、受けろ　受けい　といふところもあるが、普通には用ひない。

◎口語　蹴る　は　蹴らう　蹴つて　蹴れ　などともいつて、ら行四段活用にかはりかけて居る。

次の文から動詞を擇び出し、且、その活用及び形を示せ。

(イ)一艦でも出て來たら目に物見せてくれるぞ。

(ロ)少し下りると路は消えて、石ばかりごろ〳〵して居る。案内者は迷ひ始める、前途が心配でたまらなくなる。

(ハ)四方の山から絶えず涌き出る清水は縱横に小さな流をなして、鮎のはしる二つの川に落ち合ふ。

(ニ)兎角世間の人は、事業の成功する前にはや根氣が盡きて疲れてしまふから、大事が出來ぬのだ。

(ホ)世の學問に志す者は、とかく低いところを經ないでずぐに高いところへ登らうとする弊がある。それでは低いところにさへ屆くことも出來ない。

第九章　動詞の自他

動詞はその性質上、之を自動詞と他動詞とに分ける。

自動詞　「火消ゆ」「水流る」の　消ゆ　流る　のやうに、動作の主

たる語即ち　火　水　の外、別に動作を受ける目的の語を要しない動詞をいふ。

他動詞　「小兒、獨樂を廻す。」「生徒、本を讀む」の　廻す　讀む　のやうに、動作の主たる　小兒　生徒　の外に、動作を受ける目的の語即ち　獨樂　本　等を加へて、文意の始めて通ずる動詞をいふ。

◎他動詞には必ず「何々を」といふ目的を示す語を要する。但し「文(を)讀む窓。」「此の枝(を)折るべからず。」などのやうに　を　を略することがある。

◎又、稀には「道を行く。」「門を入る。」の　行く　入る　のやうに、自動詞でありながら　を　を受けるものもある。

動詞には自動詞のみで之に對する他動詞のないものがあり、又他動詞のみで之に對する自動詞のないものがある。又自他共にその語形の全く同じなものがあり、自他によつてその活用のちがふものがある。

自動詞ばかりの動詞

眠る　有り　死ぬ　來る　など。

他動詞ばかりの動詞

打つ　殺す　投ぐ　送る　など。

自他同形の動詞

吹く（か行四段）……風吹く。（自）　牧童笛を吹く。（他）

閉づ（だ行上二段）……門閉づ。（自）　下女門を閉づ。（他）

垂る（ら行下二段）……尾垂る。（自）　犬尾を垂る。（他）

語のもとが同じで自他の活用がちがふ動詞

語のもとが同じで自他によつてその活用のちがふ動詞

育つ（た行四段(自)）　子育つ。
（た行下二段(他)）　母子を育つ。

癒ゆ（や行下二段(自)）　病癒ゆ。
（さ行四段(他)）　醫師病を癒す。

足る（ら行四段(自)）　衣食足る。
（さ行四段(他)）　仁君民の衣食を足す。

見ゆ（や行下二段(自)）　月見ゆ。
（ら行上一段(他)）　少年月を見る。

次の文から動詞を擇び出し、且、その自他を分けよ。

(イ)人若うしては學ばんことを願ひ、老いては敎へんことを欲す。

(ロ)花咲く春のあけぼのを、はやとく起きて見よかしと、鳴く鶯も心して、人の夢をぞさましける。

(ハ)心こゝにあらざれば、視れども見えず、聽けども聞えず、食へどもその味を知らず。

(ニ)凡そ蠶を養ふや、夙に起き、夜に寢ね、桑葉を摘み、汚物を除くはいふも更なり、或は室を溫暖にし、或はこれを清涼にし、水を撒きて乾燥を防ぎ、火を焚きて濕氣を防ぐなど、片時も注意を怠るべからず。

次の動詞に自他の誤があつたら正せ。

(イ)塵もつもりて山となす。

(ロ)試驗を終へば一先歸らん。

(ハ)小事を以てその心を動くことなかれ。

(ニ)庭の趣は年と共に加へたり。

(ホ)一同聲を揃へて萬歳を三呼す。

(ヘ)日を暮れ夜を明かす。

(ト)舟を浮べて月を中流に賞す。

次の諸動詞の自他を分けよ。又活用によつて自他のちがふものがあつたら、一一これを示せ。

解く。照す。寄す。生ゆ。沸す。立つ。倒る。起す。及す。伸ぶ。止る。

第十章　動詞の音便

四段に活用する動詞の語尾が　て、　口語では　た　て　たり　につゞく時には、發音の便宜によつて、他の音に轉ずることがある。之を動詞の音便といふ。

動詞の音便は次の如く四種ある。

い音便　か行及びが行四段活用動詞の語尾の　き　ぎ　が　い　に轉ずるもの。

聞きて……（文）聞いて　聞いた　聞いて　聞いたり（口）

動詞の音便

い音便

脱ぎて……（文）脱いで　脱いだ　脱いで　脱いだり（口）

◎ぎ　がい音便に轉ずるときは、次に來る　た　て　たり　は　だ　で　だり　と濁る。

◎「差して」が「差いて」となるやうに、稀にさ行四段活用の語尾の　し　が　い　に轉ずることもある。

◎口語で「差いて」「起いて」などいふ地方もあるけれど、用ひぬ方がよい。

◎「聞ひて」「脱ぬで」などと書き誤つてはならぬ。

う音便　は行四段活用の動詞の語尾の　ひ　が　う　に轉ずるもの。

う音便

問ひて……問うて（文）
　　問う　て　た
　　たり（口）

◎「問ふて」などと書き誤つてはならぬ。

撥音便

な行・ば行・ま行四段活用の動詞の語尾の　に　び　み　が撥音　ん　に轉ずるもの。

死にて……死んで（文）
　　死ん　で　だ
　　だり（口）

呼びて……呼んで（文）
　　呼ん　で　だ
　　だり（口）

讀みて……讀んで（文）
　　讀ん　で　だ
　　だり（口）

◎に　び　み　が撥音便に轉ずるときには、た　て　たり（口）は　だ　で　だり　と濁る。

◎「死むで」「讀むで」などと書き誤つてはならぬ。

促音便

た行・は行・ら行四段活用の動詞及びら行變格活用の動詞の語尾の　ひ　ち　り　が促音に轉ずるもの。

打ちて……打つて（文）
　　打つ　て　た
　　たり（口）

從ひて……從つて（文）
　　從つ　て　た
　　たり（口）

有りて……（文）

有つて
有つて　た
たり　（口）

次の文にある動詞を成るたけ音便に改めよ。

（イ）勝ちて冑の緒を締めよ。

（ロ）注ぎては大瀛の水となり、凝りては百錬の鐵とする。

（ハ）進みては忠を盡さんことを思ひ、退きては君の過を補はんことを思ふ。

（ニ）朝には星を戴きて出で行き、夕には月を踏みて歸り來。

次の文に假名遣の誤があつたら正せ。

（イ）溪に沿ふて進む。

（ロ）敵は終に國を割ひて和を請うた。

（ハ）つゝしむで貴君の健康を祝はん。

（ニ）仰いで天に愧ぢず。

（ホ）這う這うの體で逃げ込むだ。

（ヘ）強ゐて飲食をすゝめるものでない。

第十一章　動詞の語尾の假名遣

問ひて　老いて　率ゐて
强ふ　報ゆ　餓う
教へて　消えて　植ゑて
出づ　交ず

右の例のやうに、動詞の語尾の　ひ　い　ゐ、ふ　ゆ　う、へ　え　ゑ、づ　ず　などの假名は、發音が同じやうに聞えるため、互に紛れ易い。

動詞の語尾の假名遣を正しくするには左の諸法によるがよい。

一、その動詞の活用を明かにすること。

例へば　堪　がは行の下二段、絶　かや行の下二段に活用することを知つたならば、すぐに　堪え　堪ゆ　が　堪へ　堪ふ　の誤であること、絶へ　絶ふ　が　絶え　絶ゆ　の誤であることがわかる類である。

二、少ない方の活用並に假名遣を記憶して、他の多い方を推定すること。

例へば　わ行下二段に活用するのは、通例　植え（栽え）　餓え（飢え）　据えの三語であるといふことを記憶すれば、その他の　癒え　覺え　消え　榮え　絶え　殖え　吠え　見え　燃え　などは皆や行下段二段活用だと推定することが出來る類である。

三、本來の活用と音便との別を明かにすること。

例へば　問ひて　の　問ひ　はは行四段本來の活用で、説いて　の　説い　はか行四段活用　説き　のい音便であることを知つたならば、問ひて　説いて　の假名遣を誤ることのない類である。

今語尾の假名遣の誤り易い動詞の重なものを左に示さう。

四段活用　四段活用には、は行があつてわ行はない。故に　買は　思は　問は　叶は　のやうにわ行四段に聞えるものは、一切は行四段活用である。

上二段活用　此の活用で誤り易いのは、だ行・は行・や行の三活用である。今その重なものを左に示さう。

だ行上二段……怖・綴・閉・恥・攀……ぢ　づ　づる　づれ

◎ざ行上二段活用はない。

は行上二段……生・繰・强・誣・用……ひ　ふ　ふる　ふれ

や行上二段……老・悔・報（酬）……い　ゆ　ゆる　ゆれ

◎わ行上二段活用はない。

下二段活用　此の活用で誤り易いのは、ざ行・だ行・は行・や行・わ行な

どの諸活用である。今その重なものを左に示さう。

さ行下二段……交(マ)……………………ぜ　ず　ずる　ずれ
だ行下二段……出(イ)・撫(ナ)・擢(ヌキン)・秀(ヒイ)・詣(マウ)・愛(メ)……で　づ　づる　づれ
や行下二段……{癒(イ)・覺(オボ)・消(キ)・聞(キコ)・肥(コ)・越(コ)・凍(コヾ)　冴(サ)・榮(サカ)・聳(ソビ)・絶(タ)(斷)・生(ハ)・冷(ヒ)　殖(フ)・吠(ホ)・諞(マミ)・見(ミ)・燃(モ)・萌(モ)}……え　ゆ　ゆる　ゆれ
わ行下二段……植(ウ)・栽(ウ)・餓(ウ)(飢)・据(ス)………ゑ　う　うる　うれ

◎下二段活用の中　は行　は　や行　わ行　に比べればその數が頗る多くて、八十餘語ある。故に　や行　わ行　に屬する重な語を記憶し、その他は大抵　は行　だと心得るがよい。

次の文に假名遣の誤があつたら正せ。
(イ)笑ふて答へず。

[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
や行上二段	報	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
ら行上二段	懲	り	り	る	るゝ	るれ	りよ
か行上一段	「着」	き	き	きる	きる	きれ	きよ
な行上一段	「似」	に	に	にる	にる	にれ	によ
は行上一段	「干」	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
ま行上一段	「見」	み	み	みる	みる	みれ	みよ
や行上一段	「射」	い	い	いる	いる	いれ	いよ
わ行上一段	「居」	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
あ行下二段	「得」	え	え	う	うる	うれ	えよ
か行下二段	受	け	け	く	くる	くれ	けよ
が行下二段	投	げ	げ	ぐ	ぐる	ぐれ	げよ
さ行下二段	馳	せ	せ	す	する	すれ	せよ
ざ行下二段	交	ぜ	ぜ	ず	ずる	ずれ	ぜよ
た行下二段	捨	て	て	つ	つる	つれ	てよ
だ行下二段	撫	で	で	づ	づる	づれ	でよ
な行下二段	尋	ね	ね	ぬ	ぬる	ぬれ	ねよ
は行下二段	教	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へよ
ば行下二段	統	べ	べ	ぶ	ぶる	ぶれ	べよ
ま行下二段	褒	め	め	む	むる	むれ	めよ
や行下二段	榮	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
ら行下二段	枯	れ	れ	る	るゝ	るれ	れよ
わ行下二段	植	ゑ	ゑ	う	うる	うれ	ゑよ
か行下一段	「蹴」	け	け	ける	ける	けれ	けよ

[illegible]	[illegible]	み	み	みる	みる	みれ	みよ
や行上一段	報	い	い	いる	いる	いれ	いよ
ら行上一段	懲	り	り	りる	りる	りれ	りよ
か行上一段	「着」	き	き	きる	きる	きれ	きよ
な行上一段	「似」	に	に	にる	にる	にれ	によ
は行上一段	「干」	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
ま行上一段	「見」	み	み	みる	みる	みれ	みよ
や行上一段	「射」	い	い	いる	いる	いれ	いよ
わ行上一段	「居」	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
あ行下一段	得	え	え	える	える	えれ	えよ
か行下一段	受	け	け	ける	ける	けれ	けよ
が行下一段	投	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ
さ行下一段	馳	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
ざ行下一段	交	ぜ	ぜ	ぜる	ぜる	ぜれ	ぜよ
た行下一段	捨	て	て	てる	てる	てれ	てよ
だ行下一段	撫	で	で	でる	でる	でれ	でよ
な行下一段	尋	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ねよ
は行下一段	教	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ
ば行下一段	統	べ	べ	べる	べる	べれ	べよ
ま行下一段	褒	め	め	める	める	めれ	めよ
や行下一段	榮	え	え	える	える	えれ	えよ
ら行下一段	枯	れ	れ	れる	れる	れゝ	れよ
わ行下一段	植	ゑ	ゑ	ゑる	ゑる	ゑれ	ゑよ
か行下一段	「蹴」	け	け	ける	ける	けれ	けよ

動詞活用形對照表

文語

活用	語幹の例	未然	連用	終止	連體	已然	命令
か行四段	咲	か	き	く	く	け	け
が行四段	漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
さ行四段	推	さ	し	す	す	せ	せ
た行四段	持	た	ち	つ	つ	て	て
は行四段	習	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
ば行四段	學	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
ま行四段	讀	ま	み	む	む	め	め
ら行四段	賣	ら	り	る	る	れ	れ
ら行變格	有	ら	り	り	る	れ	れ
な行變格	往	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
か行變格	來	こ	き	く	くる	くれ	こよ
さ行變格	「爲」	せ	し	す	する	すれ	せよ
か行上二段	生	き	ぎ	く	くる	くれ	きよ
が行上二段	過	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎよ
た行上二段	落	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
だ行上二段	閉	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢよ
は行上二段	強	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ
ば行上二段	亡	び	び	ぶ	ぶる	ぶれ	びよ
ま行上二段	試	み	み	む	むる	むれ	みよ
や行上二段	報	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
ら行上二段	懲	り	り	る	るゝ	るれ	りよ
か行上一段	「着」	き	き	く	くる	くれ	きよ
な行上一段	似	に	に	ぬ	ぬる	ぬれ	によ
は行上一段	干	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ
ま行上一段	見	み	み	む	むる	むれ	みよ
や行上一段	射	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
わ行上一段	居	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
あ行下二段	「得」	え	え	える	える	えれ	えよ
か行下二段	受	け	け	ける	ける	けれ	けよ
が行下二段	投	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ
さ行下二段	馳	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
ざ行下二段	交	ぜ	ぜ	ぜる	ぜる	ぜれ	ぜよ
た行下二段	捨	て	て	てる	てる	てれ	てよ

口語

活用	語幹の例	未然	連用	終止	連體	假定	命令
か行四段	咲	か	き	く	く	け	け
が行四段	漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
さ行四段	推	さ	し	す	す	せ	せ
た行四段	持	た	ち	つ	つ	て	て
は行四段	習	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
ば行四段	學	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
ま行四段	讀	ま	み	む	む	め	め
ら行四段	賣	ら	り	る	る	れ	れ
ら行四段	有	ら	り	る	る	れ	れ
な行四段	往	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
か行變格	來	こ	き	くる	くる	くれ	こい
さ行變格	「爲」	せ	し	する	する	すれ	せよ
か行上一段	生	き	ぎ	きる	きる	きれ	きよ
が行上一段	過	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ
た行上一段	落	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ
だ行上一段	閉	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ
は行上一段	強	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
ば行上一段	亡	び	び	びる	びる	びれ	びよ
ま行上一段	試	み	み	みる	みる	みれ	みよ
や行上一段	報	い	い	いる	いる	いれ	いよ
ら行上一段	懲	り	り	りる	りる	りれ	りよ
か行上一段	「着」	き	き	きる	きる	きれ	きよ
な行上一段	似	に	に	にる	にる	にれ	によ
は行上一段	干	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
ま行上一段	見	み	み	みる	みる	みれ	みよ
や行上一段	射	い	い	いる	いる	いれ	いよ
わ行上一段	居	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
あ行下一段	得	え	え	える	える	えれ	えよ
か行下一段	受	け	け	ける	ける	けれ	けよ
が行下一段	投	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ
さ行下一段	馳	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
ざ行下一段	交	ぜ	ぜ	ぜる	ぜる	ぜれ	ぜよ
た行下一段	捨	て	て	てる	てる	てれ	てよ

動詞活用形對照表

文語

活用	語幹の例	未然	連用	終止	連體	已然	命令
か行四段	咲	か	き	く	く	け	け
が行四段	漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
さ行四段	推	さ	し	す	す	せ	せ
た行四段	持	た	ち	つ	つ	て	て
は行四段	習	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
ば行四段	學	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
ま行四段	讀	ま	み	む	む	め	め
ら行四段	賣	ら	り	る	る	れ	れ
ら行變格	有	ら	り	り	る	れ	れ
な行變格	往	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
か行變格	「來」	こ	き	く	くる	くれ	こよ
さ行變格	「爲」	せ	し	す	する	すれ	せよ
か行上二段	生	き	ぎ	く	くる	くれ	きよ
が行上二段	過	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎよ
た行上二段	落	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
だ行上二段	閉	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢよ
は行上二段	強	ひ	び	ふ	ふる	ふれ	ひよ
ば行上二段	亡	び	び	ぶ	ぶる	ぶれ	びよ
ま行上二段	試	み	み	む	むる	むれ	みよ
や行上二段	報	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
ら行上二段	懲	り	り	る	るる	れる	りよ
か行上一段	「着」	き	ひ	く	くる	くれ	きよ
な行上一段	似	に	に	ぬ	ぬる	ぬれ	によ
は行上一段	干	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ
ま行上一段	見	み	み	む	むる	むれ	みよ
や行上一段	射	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
わ行上一段	居	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
あ行下二段	得	え	え	え	える	えれ	えよ
か行下二段	受	け	け	け	ける	けれ	けよ
が行下二段	投	げ	げ	げ	げる	げれ	げよ
さ行下二段	馳	せ	せ	せ	せる	せれ	せよ
ざ行下二段	交	ぜ	ぜ	ぜ	ぜる	ぜれ	ぜよ
た行下二段	捨	て	て	て	てる	てれ	てよ
だ行下二段	撫	で	で	で	でる	でれ	でよ
な行下二段	尋	ね	ね	ね	ねる	ねれ	ねよ
は行下二段	敎	へ	へ	へ	へる	へれ	へよ
ば行下二段	統	べ	び	ぶ	ぶる	ぶれ	べよ
ま行下二段	褒	め	み	む	むる	むれ	めよ
や行下二段	榮	え	え	え	える	えれ	えよ
ら行下二段	枯	れ	り	る	るる	れる	れよ
わ行下二段	植	ゑ	ゐ	ゑる	ゑる	ゑれ	ゑよ
か行下一段	「蹴」	け	け	ける	ける	けれ	けよ

口語

活用	語幹の例	未然	連用	終止	連體	假定	命令
か行四段	咲	か	き	く	く	け	け
が行四段	漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
さ行四段	推	さ	し	す	す	せ	せ
た行四段	持	た	ち	つ	つ	て	て
は行四段	習	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
ば行四段	學	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
ま行四段	讀	ま	み	む	む	め	め
ら行四段	賣	ら	り	る	る	れ	れ
ら行四段	有	ら	り	る	る	れ	れ
な行四段	往	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね
か行變格	「來」	こ	き	くる	くる	くれ	こい
さ行變格	「爲」	せ	し	する	する	すれ	せよ
か行上一段	生	き	ぎ	きる	きる	きれ	きよ
が行上一段	過	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ
た行上一段	落	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ
だ行上一段	閉	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ
は行上一段	強	ひ	び	ひる	ひる	ひれ	ひよ
ば行上一段	亡	び	び	びる	びる	びれ	びよ
ま行上一段	試	み	み	みる	みる	みれ	みよ
や行上一段	報	い	い	いる	いる	いれ	いよ
ら行上一段	懲	り	り	りる	りる	りれ	りよ
か行上一段	「着」	き	ひ	きる	きる	きれ	きよ
な行上一段	似	に	に	にる	にる	にれ	によ
は行上一段	干	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
ま行上一段	見	み	み	みる	みる	みれ	みよ
や行上一段	射	い	い	いる	いる	いれ	いよ
わ行上一段	居	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
あ行下二段	得	え	え	える	える	えれ	えよ
か行下二段	受	け	け	ける	ける	けれ	けよ
が行下二段	投	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ
さ行下二段	馳	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
ざ行下二段	交	ぜ	ぜ	ぜる	ぜる	ぜれ	ぜよ
た行下二段	捨	て	て	てる	てる	てれ	てよ
だ行下二段	撫	で	で	でる	でる	でれ	でよ
な行下二段	尋	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ねよ
は行下二段	敎	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ
ば行下二段	統	べ	び	ぶる	ぶる	ぶれ	べよ
ま行下二段	褒	め	み	むる	むる	むれ	めよ
や行下二段	榮	え	え	える	える	えれ	えよ
ら行下二段	枯	れ	り	るる	るる	れる	れよ
わ行下二段	植	ゑ	ゐ	ゑる	ゑる	ゑれ	ゑよ
か行下一段	「蹴」	け	け	ける	ける	けれ	けよ

(ロ)怨に報うるに德を以てす。
(ハ)百年の計は德を樹ゆるにあり。
(ニ)餓え凍ゆとも、武士の體面を傷つけじ。
(ホ)負ふた子に教えられて淺瀨をわたる。(ロ)
(ヘ)砲臺を構ゑ、大砲を据えつく。
(ト)望絶へて、不安の念に堪へず。
(チ)年老ひて後、悔ゆとも詮なし。
(リ)心に恥じて、眼を閉づ。
(ヌ)高く聳へたる山を越えつゝ進む。
(ル)春雪漸く消ゑて、草木萌へ出ず。
(ヲ)夜ふけ月冴へて、犬の吠ゆる聲しきりに聞ゑけり。

第十二章　形容詞の活用

「く……山高く、水長し。」

高（タカ）
- し……山高し。
- き……高き山を越ゆ。
- けれ……山高ければ眺望に富む。

語幹

語尾活用

前例のやうに、形容詞も亦その語の下部が變化する。而して「た」か　のやうに變化しない部分を**語幹**といひ、「く」「し」「き」「けれ」のやうに變化する部分を**語尾**といひ、その變化することを**活用**といふ。

第一類の活用

形容詞の活用には左の二つの種類がある。

第一類の活用　高し　青し　深し　などのやうに、語幹の最後の音が「し」又は「じ」でなく、且、語尾が「く」「し」「き」「けれ」と活用するものをいふ。

語幹例	語尾
高	く
青	し
深	き
	けれ

第二類の活用

第二類の活用　美し　同じ　などのやうに、語幹の最後の音が「し」又は「じ」で、語尾が「く」「き」「けれ」とだけ活用し、「し」といふ語尾のないものをいふ。

語幹例	語尾
美し	く
同じ	○
	き
	けれ

口語形容詞の活用

口語では、第一類と第二類との別がなく、左の表のやうに「く」「い」「けれ」と活用する。

語幹例	語尾

高 美し	く	い	けれ

次の文から形容詞を擇び出し、且、その活用を示せ。

(イ)山けはしく、水清く、松青く、砂白し。

(ロ)近き舟は行けども、遠き帆影は動かんともせず。

(ハ)家は貧しけれど、慈愛の心いと篤し。

(ニ)あなうれし、よろこばし、戰勝ちぬ。

(ホ)都會は物價貴ければ、出費多く、交際繁ければ、萬事うるさきこと多し。

(ヘ)母のこの世にましまさん間は、獨身にてあるこそよけれ。たゞ貧しきがために心に任せぬ事の多きぞうらめしき。

(ト)旅行すると、面白い事も多いけれど、つらい事も少くない。(ロ)

第十三章　形容詞の形附音便

形容詞には未然・連用・終止・連體・已然の五つの形がある。

第一段　未然形　清く……水清くば、飲料に供せん。
　　美しく　花美しくば、手折りて瓶に挿さん。

第二段　連用形　清く……水清く澄む。
　　美しく……花美しく咲く。

第三段　終止形　清し……水清し。
　　美し……花美し。

第四段　連體形　清き……清き水を掬ぶ。
　　美しき……美しき花を手折る。

第五段　已然形　清けれ……水清ければ、飲料に供す。
　　美しけれ……花美しければ、手折りて瓶に挿す。

◎形容詞の未然形と連用形とは同形である。

◎形容詞の連用形は又中止の意に用ひる。「山高く、水深し。」「行正しく、德

高し。」の　高く　正しく　は此の例である。

◎第二類形容詞の終止形には語尾がなく、語幹そのまゝが終止形になる。

◎形容詞の**連體形**は、時として次に來る**體言を省略**することがある。「德澤遠き(國)に及ぶ。」「惡しき(者)を罰す。」の　遠き　惡しき　は此の例である。

◎形容詞には命令形がない。

形容詞の連用形と動詞ありとの結合

形容詞の連用形は、動詞　あり　と結合して、ら行變格活用となる。

清くあら　清くあり　清くある　清くあれ

美しくあら　美しくあり　美しくある　美しくあれ

形容詞の連用形と動詞すとの結合

形容詞の連用形は、又、動詞　す　と結合して、さ行變格活用となることがある。

し　せ

し　せ

清く　す　する　すれ

同じく　す　する　すれ

形容詞のう音便

此の　く　は又う音便で　う　に轉ずることがある。

辱う　す　し　せ　する　すれ

等しう　す　し　せ　する　すれ

形容詞のい音便

形容詞の連體形の語尾　き　は、又い音便で　い　に轉ずることがある。

善きかな……善いかな。

悲しきかな……悲しいかな。

口語形容詞の形

口語では「水が清い。」（終止）「清い水。」（連體）「花が美しい。」（終止）「美しい花。」（連體）のやうに、終止・連體の二形が同じ形になる。從つて第一類・第二類の區別は全くない。

語幹例	語尾 未然	連用	終止	連體	已然（文）假定（口）
文 清	く	く	し。	き。	けれ
口 清	く	く	い。	い。	けれ
文 美し	く	く	○	き。	けれ
口 美し	く	く	い。	い。	けれ

次の文に於ける形容詞を指摘し、且その活用及び形を示せ。

(イ) 長く住めば、都會の生活には苦勞多く、不愉快多し。

(ロ) 道遠くば汽車にて行くべく、近くば徒歩にて行くべし。

(ハ) 人は交る友により、善きに惡しきにうつるなり。

(ニ) はでなる娯樂こそ田舍住居に乏しけれ、衛生上その他の危險なきはその失を償うて餘りあるべし。

(ホ) 世間は年中いそがしく、さわがしく、街路は朝に晩に雜沓す。都會が衛生に宜しからざるは明白なり。まして、火災などの害も都會に多かるをや。

(ヘ) 低き家、狹き町、淋しき松繩手、丈高き稻の穗、鼻の先に並びたる連山、をさなき頃より見なれたる一軒家、皆莞爾として我を迎ふるが如く、何れなつかしからぬはなし。

(ト) あやにたふときすめらぎの、あやにかしこきすめらぎの、あやにたふとくかしこくも、下し賜へり、大御言。

(チ) 櫻の花は空青く水清い日本の風土に最もよく釣合つて、深山・市中、どこにあつても皆よろしい。（ロ）

(リ) どんよりと曇つて、寒くもなく暑くもない日和を花曇といふ。夜は照りも

せず疊りもはてぬ朧月夜雲霞とまがふ花には最もふさはしい景色である。

（ロ）

次の文の誤を正せ。

（イ）任重ふして道遠し。

（ロ）善ひかな、言や。

（ハ）人を笑ふて喜ぶは惡しき。

（ニ）貴賓の來臨を辱ふす。

（ホ）ひもじゐときにまづひものはない　（ロ）

（ヘ）よふこそお出で下さいましてありがとう存じます。

（ト）わるゐことはせぬがよろしふございます。

助動詞の種類

第十四章　助動詞の種類及び活用　その一

助動詞は重に動詞に添うてその意味をあらはすものであるけれど、他の助動詞に添ふこともあり、稀には名詞・代名詞に添ふことも

時の助動詞

過去

未來

完了

ある。通例その意義によつて、時・打消・推量・受身・可能・使役・尊敬・指定・詠歎・希望・比説の十一種に大別する。

時の助動詞　動作の行はれる時を示すもので、之に過去・未來・完了の三種ある。

過去の助動詞は　き　けり　の二語で、今から前に動作が起つたことを示し、**未來の助動詞**は　む　の一語で、今より後に動作の起るべきを示し、**完了の助動詞**は　つ　ぬ　たり　り　の四語で、動作の今了つた意を示す。

過去…昨日大雪降り　き。……き　し　しか
　　けり。……けり　ける　けれ

未來…明日は大雪降らむ……む　め

大雪降り　つ。……て　つ　つる　つれ
　　ぬ。……な　に　ぬ　ぬる　ぬれ　ね

完了……

たり。……たら　たり　たる　たれ
大雪降れり。……ら　り　る　れ

英雄たれ

◎たり　り　は「花咲きたり。」我が宿に大雪降れり。」などのやうに用ひて、動作の繼續進行することをあらはすことがある。之を**進行的現在**又は**繼續的現在**といふ。

進行的現在

現在の時

◎**現在の時**は別に助動詞を用ひず、動詞そのまゝであらはされる。

恆の時

◎「水は低きに就く。」「雨降つて地固まる。」のやうに、眞理・習慣等をあらはすには、現在の形を用ひる。之を**恆の時**といふ。

◎助動詞の　む　は今では　ん　と發音し、從つて通例　ん　とも書く。

人のものをうしなふものは大口輪もはかるは大口輪も尺口見らざり（啄木）

打消の助動詞

打消の助動詞　ず　ざり　じ　まじ　のやうに、動作を否定するものをいふ。

ず。……ず　ぬ　ね
降ら　ざりき。ざら　ざり　ざる　ざれ

いつなりき。
夢さふとき
うれしかり
其の声もきれ
ちく間のざり

推量の助動詞

雪
降る　じ。……（活用せず。）
降る　まじ。　まじく　まじ　まじき　まじけれ

◎じ　まじ　は推量して否定する意味である。

推量の助動詞　らむ　らし　べし　べかり　めり　む　まし　けむ　のやうに事實を推量する意に用ひるものをいふ。

雪
降る　らむ。……らむ　らめ
らし。……活用せず。
べし。……べく　べし　べき　べけれ
べかりき。べから　べかり　べかる　べかれ
めり。……めり　める　めれ
降ら　む。……む　め
降り　まし。……まし　ましか
降り　けむ。……けむ　けめ

◎けむ　は過去の動作を推量するに用ひる。

◎らむ　むけむ　はらん　んけん　と發音し、從つて通例　らん　んけん　と書く。

受身の助動詞

受身の助動詞　次の例の　る　らる　のやうに、動作を他からしかけられる意を示すものをいふ。

犬、猫に追はる。……れ　る　るゝ　るれ

馬丁、馬に蹴らる。られ　らる　らるゝ　らるれ

可能の助動詞

可能の助動詞　次の例の　る　らる　べし　べかり　のやうに、そのものゝ力でなし得る意を示すものをいふ。

一時間に二里は走らる。……れ　る　るゝ　るれ

此の間には我も答へらる。……られ　らる　らるゝ　らるれ

千引の岩もくだくべし。……べく　べし　べき　べけれ

美しさ名狀すべからず。……べから　べかり　べかる　べかれ

べしの他の用法

自發の助動詞

◎る　らる　の活用は受身の　る　らる　と同じで、べし　べかり　の活用は推量の　べし　べかり　と同じである。

◎べし　は推量・可能の外、「子たるものは親に孝なるべし。」のやうに、當然の意に用ひることがある。「明日出頭すべし。」のやうに、命令の意に用ひることがある。又、「今後は斷じて過を再びせざるべし。」のやうに、決心の意に用ひることもある。

◎る　らる　は、「子の行末思はる。」「父の身の上を案ぜらる。」のやうに、動作が自ら起つて止め難き意に用ひることがある。かやうな場合には、之を自發の助動詞といふ。

次の文の中から既に學んだ助動詞を擇び出し、且、之を類別せよ。

(イ)若し懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。

(ロ)朝は水澄めれば、底の眞砂も數へつべし。

(ハ)朝餐に列なれる人の、一人も缺けず、一日の務を終へて集りたる嬉しからずといはんや。

(ニ)此の兒、利根こそ生れつきたらめ、なほ幼くして、その氣根のほどもはかりがたく、家富めりとも見えねば、黄金の事心得られず。

(ホ)冬に至りぬれば、日短くなりて、課もまだ滿たざるに、日暮れんとすることたびたびにて、西向なる竹緣の上に机を持ち出でて書き終へぬる事もありき。

(ヘ)十一歳の秋また課を立てられて庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて十日のうちに淨寫して參らすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに事を終へしかば、冊になして見せまゐらす。褒めたまふこと大方ならず。

使役の助動詞

第十五章　助動詞の種類及び活用　その二

使役の助動詞　次の例の　す　さす　しむ　のやうに、他のものに動作をさせる意を示すものをいふ。

下男に水を汲ま(す)。……せ　す　する　すれ

尊敬の助動詞

下婢に塵を捨て(しむ。…しめ　しむ　しむる　しむれ　さす。…させ　さす　さする　さすれ

尊敬の助動詞　次の例の　る　らる　す　さす　のやうに、他の動作を敬ふ意を示すものをいふ。

父上はよく字を書かる。

先生は本日缺席せらる。

皇子殿下には學習院に御通學あらせらる。

皇后陛下には濱離宮に行啓せさせ給ふ。

天皇陛下には觀艦式に臨ましめ給ひき。

◎る　らる　の活用は受身・可能の　る　らる　に同じで、せ　させ　しめ　の活用は使役の　せ　させ　しめ　に同じである。

◎尊敬の　せ　させ　しめ　は單獨に用ひることなく、通例、尊敬の助動

詞　らる　又は動詞　たまふ　を下につけて用ひる。

指定の助動詞

指定の助動詞　次の例の　なり　たり　のやうに、事物を指定する意を示すものをいふ。

艱難は我が師なり。……なら　なり　なる　なれ

我は我たり。……たら　たり　たる　たれ

◎指定の助動詞は通例名詞・代名詞につゞく。

◎「勉強もするなり。」「それがよきなり。」のやうに、用言の連體形の下につくのは、その間に名詞が略されたのである。

◎指定の　たり　は、完了　の　たり　と形が同じであるが、意味は全くちがふ。

詠歎の助動詞

詠歎の助動詞　次の例の　なり　けり　のやうに、感動の意を示すものをいふ。

秋の野に人まつ虫の聲すなり。……なり　なる　なれ

ふり行くものは我が身なりけり。……けり　ける　けれ

◎指定の　なり　は動詞・形容詞の連體形又は名詞・代名詞から受け、詠歎の　なり　は動詞・助動詞の終止形から受ける。

希望の助動詞

希望の助動詞　次の例の　たし　まほし　のやうに、動作をしたいと望む意を示すものをいふ。

花見に　行きたし。……たく　たし　たき　たけれ

　　行かまほし。……まほしく　まほし　まほしき　まほしけれ

比說の助動詞

比說の助動詞　次の例の　ごとし　のやうに、事物を比較說明する意に用ひるものをいふ。

歲月は流るゝごとし。……ごとく　ごとし　ごとき

◎ごとし　は「月色銀のごとし。」「落花蝶の舞ふがごとし。」のやうに、助詞

の　が　にも連なる。

次の文から助動詞を擇び出し、且、その活用を示せ。

(イ)旅行したきは山々なれど、父上の許させ給はぬをいかにせん。

(ロ)父は父たらずとも、子は子たらざるべからず。

(ハ)男のすなる日記といふものを、女もして見んとてするなり。

(ニ)さこそ待るべけれど、太刀使ふ事少しも心得ざらんには、刀脇差腰にせんこと誠に不用の事にや。といひしかば、のたまふところまことに然なり。とて、傳へて習はしめたり。

(ホ)人の子たらんものは、重盛がその父に對するごとくあらまほしきものなり。

(ヘ)明けの年の秋、また國に往きたまひしあとにて、課を立てられて、日のうちには行草の字三千、夜に入りて一千字をかぎりて書き出すべしと命ぜられたり。

(ト)兩陛下には仁慈の御心に富ませられ、今回の震火災の慘害を聞し召していたく大御心を惱ましめ給ひ、内帑の金一千萬圓を下して罹災民を賑恤せさせられたり。

口語助動詞の種類

時の助動詞　過去　完了　未來

第十六章　口語助動詞の種類及び活用

口語の助動詞は文語の助動詞に比べるとその種類がやゝ少い。通常之を時・打消・推量・受身・可能・使役・尊敬・指定・希望の九種に分ける。

時の助動詞　これに過去及び完了を示す　た　と未來を示す　う　よう　とある。

昨日大雪が降つた。(過去)

先程風が靜まつた。(完了)　……たら　たり　た　たれ

◎この　た　がが行・な行・ば行・ま行の四段活用につゞく時は、「急いだ」「死んだ」「飛んだ」「止んだ」のやうに、動詞の語尾が　い　又は　ん　となり、た　は濁つて　だ　となる。

雨はやがて止まう。（未來）……（活用せぬ。）
もうぢきに霽れよう。（未來）……（活用せぬ。）

打消の助動詞　次のやうな　ぬ　ない　なから　まい　の四語である。

風が吹かぬ……ず　ぬ　ね
風が吹かない……なく　ない　なけれ
風が吹かなかつた……なから　なかつ
風は吹くまい……（活用せぬ。）

◎ぬ　は通例　ん　と發音し、從つて　ん　とも書く。
◎まい　は推量して打消す助動詞で、文語の　まじ　にあたる。

推量の助動詞　次のやうな　う　よう　らしい　らしから　の四語である。

明日は多分風が吹かう……（活用せぬ。）

今夜は友達が尋ねて來よう。……（活用せぬ。）
どうやら雪が降るらしい……らしく　らしい
來たらしかつた……らしから　らしかつ

◎う　よう　は文語の　む　にあたり、らしい　は　らし　にあたる。
◎文語の　けむ　の意は口語では　たら　う　の二助動詞であらはす

受身の助動詞　次のやうな　れる　られる　の二語である。

猫が犬に追はれる……れ　れる　れゝ　れよ
馬丁が馬に蹴られる……られ　られる　られゝ　れよ

◎れる　は文語の　る　にあたり、られる　は　らる　にあたる。

可能の助動詞　次のやうな　れる　られる　の二語である。

一時間に三里は走られる。
此の問には我も答へられる。

◎此の助動詞は受身の助動詞から出たものである。

◎可能の　れる　の　れ　は四段活用動詞の未然形と結びついて、次の例のやうに約まることがある。

讀まれる……讀める　歩かれる……歩ける。

使役の助動詞

使役の助動詞　次のやうな　せる　させる　の二語である。

下男に水を汲ませる……せる　せる　せれ　せよ

下婢に塵を捨てさせる……させる　させる　させれ　させよ

◎せる　は文語の　す　にあたり、させる　は　さす　にあたる。

◎させる　がさ行變格の　せ　につゞくときは、次の例のやうに　せ

と　さ　とが　さ　と約まつて　させる　となる。

かはゆい子には旅をせさせる。

尊敬の助動詞

尊敬の助動詞　次のやうな　れる　られる　の二語である。

父上はよく字を書かれる。

先生は今日出席せられる。

◎れる　られる　の活用は、受身の　れる　られる　と同じである。

◎られる　がさ行變格の　せ　につゞくときには、次の例のやうに　せ

と　ら　とが　さ　と約まつて　される　となる。

先生は今日出席せられる。

對話の助動詞

此の類の助動詞に　ます　がある。

只今參ります……ませ　まし　ます（まする）　ますれ（ませまし）

此の　ます　は動作の主に對する尊敬ではなくて、話の相手に對する尊敬を示す。それゆゑこれを對話の助動詞といふ。

指定の助動詞

指定の助動詞　次のやうな　だ　です　の二語である。

此の本は私の（だ……だら　だつ　だ／です……でせ　でし　です）

前途は有望だ。
◎だ　を　ぢや　や　といふ地方がある。
◎です　は指定の對話語である。

希望の助動詞

希望の助動詞　次のやうな　たい　たから　の二語である。

散歩がし　たい。……たく　たい　たけれ
　　たからう。…たから　たかつ

次の文から助動詞を擇び出し、且その種類と活用とを記せ。

(イ)雨は降るだらう、併し風は吹くまい。
(ロ)雨がやんだら散歩に出かけようと思つてゐます。
(ハ)苟も國運の發展をはからうとするには、國民が常に元氣をひき立てゝ倦まないといふやうに努めていかなければならぬ。
(ニ)言ひたい事は山々ございますが、何分口不調法ですから、これで御免を蒙り

助動詞の形

たいと思つて居ます。
(ホ)長男は農學校を卒業させて實業に就かせ、次男は海軍兵學校に入學させて海軍士官にした。
(ヘ)燈火を中心とした此の病床六尺の天地は、今は何物にも煩はされることのない、極めて自由な希望に充ちた世界のやうに思はれた。
(ト)自分はまだ新參のものでありましたから此度のクリスマスについて、さほど贈り物の心配はいりませんでしたが、それでもこの祭には、前夜及びその晩とも招待されて手厚い饗應を受け、兎に角家庭に於けるクリスマスの景況を一通り見ることが出來ました。

第十七章　助動詞の形

助動詞にも亦、**未然**・**連用**・**終止**・**連體**・**已然**(假定)・**命令**の六形、若しくはその中のいくつかの形がある。而してその活用の動詞に似たものは動詞に照して考へることが出來、その活用の形容詞に似たもの

は形容詞に照して考へることが出來る。今、ぬ　たし　せる(口)の三助動詞について之を略說しよう。

花咲きなば、見にゆかん。

花見に行きたくば行け。

公園に行かせよう。(口)

未然形　右の　な　たく　せ(口)　は未然形である。

花咲きにけり。

花見に行きたく思ふ。

公園に行かせた。(口)

連用形　右の　に　たく　せ(口)　は連用形である。

花咲きぬ。

花見に行きたし。

終止形　公園に行かせる。(口)

右の　ぬ　たし　せる(口)　は終止形である。

花の咲きぬる日。

花見に行きたき心地す。

公園に行かせる時。(口)

連體形　右の　ぬる　たき　せる(口)　は連體形である。

花咲きぬれば、見に行きぬ。

花見に行きたければ、出で行きたり。

公園に行かせれば、喜ぶだらう。(口)

已然形(文)　假定形(口)　右のうち　ぬれ　たければ　は已然形で、口語の　せれ　は假定形である。

花見に行きぬ。

命令形

公園に行かせよ。（ロ）

右の　ね　せよ（ロ）は**命令形**である。

◎形容詞に似た活用を爲す助動詞には命令形はない。

なほ助動詞の各形については、別表を參照せよ。

次の文から助動詞を擇び出し、且その種類及び形を示せ。

（イ）知らぬことは知らずと答ふべし。

（ロ）過ぎたるはなほ及ばざるがごとし。

（ハ）金剛石もみがかずば、玉の光はそはざらん。

（ニ）秋のはじめになりぬれば、ことしもなかばは過ぎにけり。

（ホ）大禹は聖人なれども寸陰を惜みき。衆人に至りては、當に分陰を惜むべし。

（ヘ）朝餐に列なれる人の、一人も缺けず、一日の務を終へて集りたる嬉しからずといはんや。

（ト）「あなかしこ、これ世の常の事に用ふべからず。汝が夫の一大事あらん時に

助動詞活用形對照表

△は古文のみに用ひる。
□は係結の時にのみ用ひる。

種類	時			打消	推量	受身	可能	使役	尊敬	指
	過去	完了	未來							
文語 本形	き	つ ぬ たり	む	ず ざり じ まじ	ち む らし べし べからず めり む まし けむ	る らる	る らる べし べからず	す さす しむ	る らる す さす しむ	なり
文語 未然	△け ら	て な △た ら △ば		す ざら じ まじく	べく べからず	れ られ	れ られ べく べからず	せ させ しめ	れ られ せ させ しめ	なら
文語 連用	△け り	て に △た り		ず ざり じ まじく	べく べからず めり	れ られ	れ られ べく べかり	せ させ しめ	れ られ せ させ しめ	なり
文語 終止	き け り	つ ぬ た り	む	ず じ まじ	らむ らし べし めり む まし けむ	る らる	る らる べし	す さす しむ	る らる す さす しむ	なり
文語 連體	し ける	つる ぬる たる	む	ぬ ざる じ まじき	らむ □らし べき めり べかる む まし けむ	るゝ らるゝ	るゝ らるゝ べき べかる	する さする しむる	るゝ らるゝ する さする しむる	なる
文語 已然	しか けれ	つれ ぬれ △たれ れ	め	ね ざれ □じ まじけれ	らめ □らし べけれ べかれ め まし けめ	るれ らるれ	るれ らるれ べけれ べかれ	すれ さすれ しむれ	るれ らるれ すれ さすれ しむれ	なれ
文語 命令		△て △ね △たれ		ざれ		れよ られよ		せよ させよ しめよ	れよ られよ せよ させよ しめよ	なれ
口語 本形	た	た	う よう	ぬ ない なから まい	らしい らしく らしから	れる られる	れる られる	せる させる	れる られる ます	だ
口語 未然	たら	たり て		ず なく なから	らしく らしく らしかっ	れ られ	れ られ	せ させ	れ られ ませ	だら
口語 連用	たり	た て	う よう	ぬ(ん) ない まい	らしい	れる られる	れる られる	せる させる	れる られる ます	だっ
口語 終止	た	た て	う よう	ぬ(ん) ない まい	らしい	れる られる	れる られる	せる させる	れる られる ます(まする)	だ
口語 連體	た	た て		ね なけれ		れゝ られゝ	れゝ られゝ	せる させる	れゝ られゝ ますれ	
口語 假定	たれ	たれ て				れよ られよ		せよ させよ	れよ られよ ませ(しせ)	
口語 命令						れよ られよ		せよ させよ	れよ られよ ませ(しせ)	

なり
接續し動詞形用詞の連体形及び体言より受く
詠歎し動詞助動詞の終止形より受く

たり
完了
指定し体言より受く

ない
形容詞のなし助動詞のなの見別け方
形容詞と動詞と合したもの
きよからず
副詞と動詞と合したもの
きよらあたり

口語のたは
完了か過去かを分らぬ時
は過去にしておく

助動詞活用形對照表

△は古文のみに用ひる。
□は係結の時にのみ用ひる。

種類		時 過去	時 完了	時 未來	打消	推量	受身	可能	使役	尊敬	指定	詠歎	希望	比説
文語	本形	き	つ ぬ	む	ず ざり じ まじ	む らむ らし べし めり まし けむ	る らる	る らる べし べかり	す さす しむ	る らる す さす しむ	なり たり	なり けり	たし まほし	ごとし
文語	未然	△け(ら)	て な △た(ら)		す ざら まじく	べく べから べかり	れ られ べく べから	れ られ べく べから	せ させ しめ	れ られ せ させ しめ	なら たら		たく まほしく	ごとく
文語	連用	△け(り)	て に △た(り)		ず ざり まじく	べく べかり めり	れ られ	れ られ べく べかり	せ させ しめ	れ られ せ させ しめ	なり たり		たく まほしく	ごとく
文語	終止	き け り	つ ぬ △た り	む	ず じ まじ	らむ らし べし めり む まし けむ	る らる べし	る らる べし	す さす しむ	る らる す さす しむ	なり たり	なり けり	たし まほし	ごとし
文語	連體	し け る	つる ぬる た る	む	ぬ ざる じ まじき	らむ □らし らし べき べかる める む まし けむ	る ゝ らる ゝ べき べかる	る れ らる れ べけれ べかれ	する さする しむる	る れ らる れ する さする しむる	なる たる	なる ける	たき まほしき	ごとき
文語	已然	しか け れ	つれ ぬれ △た れ	め	ね ざれ □じ まじけれ	め □らし らし べけれ べかれ めれ め ましか め	る れ らる れ べけれ べかれ	る れ らる れ べけれ べかれ	すれ さすれ しむれ	る れ らる れ すれ さすれ しむれ	なれ たれ	なれ けれ	たけれ まほしけれ	
文語	命令		て ね △た れ		ざれ		れよ られよ		せよ させよ しめよ	れよ られよ せよ させよ しめよ	なれ たれ			
口語	本形	た	た	う よう	ない なから まい	らしい らしく らしから らしかう	れる られる	れる られる	せる させる	れる られる ます	だ です		だい たから	
口語	未然	たら	てる てら てり たり て たら	う よう	ず なく なから	らしく らしく らしから らしかつ	れ られ	れ られ	せ させ	れ られ ませ	だら でせ		たく たから	
口語	連用	たり	てる てり たり て	う よう	ず なく なかつ	らしく らしく らしかつ	れ られ	れ られ	せ させ	れ られ まし	だつ でし		たく たかつ	
口語	終止	た	てる てり た	う よう	ぬ(ん) ない まい	らしい らしい	れる られる	れる られる	せる させる	れる られる ます	だ です		たい	
口語	連體	た	てる てり た	う よう	ぬ(ん) ない まい	らしい らしい	れる られる	れる られる	せる させる	れる られる ます(ますする)			たい	
口語	假定	たれ	てれ てり たれ		ね なけれ		れゝ られゝ	れゝ られゝ	せれ させれ	れゝ られゝ ますれ			たけれ	
口語	命令						れよ られよ	れよ られよ	せよ させよ	れよ られよ ませ(しませ)				

参らせよ。とて、父の賜ひし黄金にこそ。

(チ) 彼が立てた此等の功績は千載なほ朽ちぬであらう。(ロ)

(リ) 英國の上流社會が腐敗せぬのは、畢竟、運動が盛な結果だといふことです。(ロ)

(ヌ) 君が代の喇叭の聲は、恰も陛下が御身親ら前へと號令をお下し遊ばされるかの如くに感ぜられて、將卒の勇氣が百倍した。(ロ)

副詞に副ふ副詞

語を隔てゝ動詞・形容詞を限定する副詞

第十八章　副詞の用法

副詞は動詞・形容詞に副うてその意味を限定する語であるが、時としては他の副詞に副うてその意味を限定することもある。

全級殆ど皆及第せり。(殆ど　は副詞　皆　を限定してゐる。)

たいそうしづかになつた。(ロ)(たいそう　は副詞　しづかに　を限定してゐる。)

副詞は又、語を隔てて動詞・形容詞等の意味を限定することがある。

性頗る山水を好む。（頗る　は動詞　好む　を限定してゐる。）

少しも失望してゐる樣子がない。（少しも　は形容詞　ない　を限定してゐる。）

動詞・形容詞・副詞の用を爲す語を限定する副詞

右の外、副詞は動詞・形容詞又は副詞の用を爲す語に副うて之を限定することがある。

決して人を欺くべからず。（決して　は動詞の用をなす語　欺くべからず　を限定してゐる。）

たつた半日の道程です。（たつた　は形容詞の用をなす語　半日の　を限定してゐる。）

纔に一艇身の差にて敗れたり。（纔に　は副詞の用をなす語　一艇身の差にて　を限定してゐる。）

次の文から副詞を擇び出し、且、その限定してゐる語を示せ。

（イ）日やがて暮れなんとするに、風益〻涼しく、氣愈〻清し。

（ロ）商家の開業式は頗る盛なり。先づ新聞に廣告し、引札を配り、賑やかに店頭を飾りて、專ら顧客を招かんことを務む。

（ハ）われはしばらく此の地を去らんとして、かつてわが父より預かりたりし行李を更に伯父なる人に預けたり。

（ニ）都會は年中いそがしく、さわがしく、街路は朝に晩に雜沓し、砂ほこり煙の如く立ち舞ふ。

（ホ）曾て見し時には、小學讀本を高らかに讀み上げて誇らしげに人に聞かせたる男の子の、今ははや陸海軍を談じ、外國の形勢を說く程になりたるもあり。

（ヘ）たま〳〵一方を突き破つて山頂に達したかと思へば、忽ち他の砲臺から十字火をあびせかけますので、とても保ちきれません。（ロ）

（ト）小生病氣の節は度々御尋ね下され、誠に忝く存じ奉り候。近頃漸く全快いたし候間、何卒御安心下され度候。

次の――の處に副詞を挿入せよ。

（イ）汝等――校則を守るべし。

(ロ)――此の内に入るべからず。
(ハ)――その志を達せざるに年――老いたり。
(二)明日――お目にかゝりたいことがございますから、――御在宅下さいますやう、――お願ひ申します。(ロ)

第十九章　接續詞の種類及び用法

接續詞の種類

接續詞はその意味の上から之を次の四つに分ける。

並列・累加の接續詞

並列・累加の接續詞

又　且　尚　及び　況や　まして　しかのみならず（のみならず）（以上、文・口）　その上　さうして　そして　それに　それから（以上、口）　など。

◎又　尚　は副詞の接續詞に轉じたもの、及び　は動詞の接續詞に轉じたものである。

選擇の接續詞

選擇の接續詞

又は　或は　若しくは　はた（以上、文・口）　それとも（口）　など。

反意の接續詞

反意の接續詞

されども　然れども（以上、文）　但し　併し　尤も　處　しかしながら　さりながら（以上、文口）　けれども　それですが（ですが）　それですのに（ですのに）　それですけれども（ですけれども）　それでも（でも）　ところが（が）（以上、口）　など。

◎處　は名詞の接續詞に轉じたものである。

原因・理由の接續詞

原因・理由の接續詞

然れば　然らば　されば　さらば　かるが故に　故に　隨

ひて　因りて　間（以上、文）　それですから　（ですから）　それゆゑ　それで　（で）　それでは　（では）　それなら　さうすると　（すると）　さうしたら　（したら）　そこで（以上、口）　など。

◎間は名詞の接續詞に轉じたものである。

次の文から接續詞を擇び出せ。

（イ）霞か、雲か、はた雪か。

（ロ）此の山月に宜しく、又雪に宜し。されど、一株の花木だになきを憾む。

（ハ）本日出席仕るべき筈の處、昨夜より引きこもり居候間、缺席仕候條、悪しからず思召下され度候。

（ニ）本日西又は南の風、晴。但し驟雨の兆あり。

（ホ）明朝或は明晩はお尋ね申さうと思つてゐます。もつとも、雨天でしたら失禮いたすかも知れません。

次の――の處に適當な接續詞を挿入せよ。

感動詞の種類

（イ）秋は來りぬ。――暑氣未だ退かず。

（ロ）口は禍の門なり。――口は慎まざるべからず。

（ハ）今日は風は吹くであらう。――雨は降るまい。

（ニ）彼は學力が優秀で、――品行が方正です。――惜しいことに、身體が強健でありません。

第二十章　感動詞の種類及び用法

文の首につく感動詞

感動詞には、「あゝ悲し。」の　あゝ　のやうに、文の首に附くものと、「眞なるかな。」の　かな　のやうに、文の末に附くものとある。

文の首につくもの

あな……あなかしこ。　あはれ……あはれ悲しきかも。

いざ……いざ行かん。　いで……いで御話承らん。

すは……すは火事よ。　やよ……やよ待て。（以上、文）
あら……あらをかしい。　あれ……あれごらんなさい。
いゝえ……いゝえちがひます。　いえ……いえさうではない。
おや……おやさうですか。　さあ……さあお上り下さい。
さて……さて困つたものだ。　どれ……どれ出かけよう。
なに……なにかまふものか　はい……はいさやうです。
まあ……まあ立派だこと。　やあ……やあ御機嫌よう。（以上、口）

右の外、口語の感動詞に　えい　えゝ　おい　おゝ　こら　これ　そら　それ　なあに　やれ　などがある。

文の末につくもの

や……あゝかなしや。　よ……すは火事よ。
は……吾妻はや。　も……あはれ悲しも。

文の末につく感動詞

な……わが身悲しな。　かも……嬉しきかも。
かな……美なるかな。　がな……なくもがな。
ばや……花見に行かばや。　かし……勉強せよかし。（以上、文）
よ……さあ大變だよ。　な……奇麗ですな。
ね……よいお天氣ですね。　ぜ……違約してはこまりますぜ。
ぞ……落第してはなりませんぞ。　わい……嬉しいわい。（以上、口）

右の外、此の類に屬するものは少くない。

次の文から感動詞を擇び出せ。

（イ）松島や、あゝ松島や、松島や。
（ロ）おや、懷中時計が五分進んで居るぞ。（ロ）
（ハ）あつぱれ勇ましき武者振かな。
（ニ）まどかにめぐれよ、やよ子供。

(ホ)さて〳〵こまつたことになつたわい。こりやまあどうしたらよからう。(ロ)
(ヘ)あなおもしろの庭のけしきや。
(ト)かんざしよ、櫛よ、さて世は暑いこと。
(チ)あはれ、手の中の玉よとめでいつくしめる子を失ひし母の心はよ。
(リ)やよや待て、山ほとゝぎすことづてん、われ世の中に住みわびぬとよ。

助詞の種類

名詞・代名詞に添はる助詞

第二十一章　助詞の種類及び用法

助詞はその添はる語の種類によつて、左の三類に分ける。

名詞・代名詞に添はる助詞　次の例の　の　が　を　に　へ　と　より　まで　などをいふ。

私の靴。　米のなる木。　梅が枝。　花を見る。
山に登る。　前へ進め。　月と花と。　友人と遊ぶ。
倫敦より歸る。　花より團子。　横濱まで見送る。

仲つ波（のとふ意）

種々の語に添はる助詞

右の中、前の　の　は所有の關係を示し、後の　の　は動作・狀態の主を示し、が　は所有の關係を示し、を　は動作の目的を示し、に　は場所を示し、へ　は方向を示し、前の　と　は事物の並列を示し、後の　と　は共同の意を示し、前の　より　は起點を示し、後の　より　は標準を示し、まで　は到着點を示す。

口語では、起點を示す文語の　より　は　から　となり、方便を示す　にて（熟語）は　で　となる。並列を示す　と　は最終の一を省くこともある。

倫敦から歸る。　ペンで書く。　火と水と金。

種々の語に添はる助詞　次の例の　は　ば　も　ぞ　なむ　や　か　こそ　し　だに　すら　さへ　のみ　ばかり　な　な…そ　などをいふ。

雪は白し。　身をば慎む。

筆も墨もなし。　花を（ぞ／なむ）覩る。

月をこそ愛づれ。　必ずしも然らず。

ありや、なしや。　あるか、なきか。

立錐の地だになし。　禽獸すら恩を知る。

疾風さへ加はる。　粥を（のみ／ばかり）すゝる。

泣くな、笑ふな。　な泣きそ、な笑ひそ。

右の中、は　ば　は特に或事物をとり出していふに用ひ、も　は事物を竝列していふに用ひ、ぞ　なむ　こそ　し　は特に上の語を指していふに用ひ、や　か　は疑ひ又は問ふ意に用ひ、だに　すら　は輕きを示して重きを言外に悟らせる意に用ひ、

さへ　はあるが上になほ物の添ひ加はる意に用ひ、のみ　ばかり　はそれと限る意に用ひ、な　な…そ　は禁止の意に用ひる。

文語の　や　は口語では　か　となり、だに　は　でも　となり、さへ　となり、すら　は　さへ　となり、さへ　は　まで　となり、な　そ　は　な　となり、のみ　は　ばかり　となる。

あるかないか。　立錐の地さへない。

禽獸でさへ恩を知つて居る。　疾風までが加はる。

粥ばかりすゝる。　泣くな笑ふな。

◎は　ば　も　が　などは口語と文語と同じである。

◎ぞ　なむ　し　はこれに相當する口語がない。但し　こそ　は稀に口語にも用ひられる。

◎なむ　は　なん　と發音し、從つて　なん　と書く。

動詞・形容詞・助動詞に添はる助詞

動詞・形容詞・助動詞に添はる助詞　次の例の　ば　ど　ども　とも　に　を　が　つゝ　ながら　で　などをいふ。

問へば答へん。　問へば答ふ。

問へ（ど／ども）答へず。　問ふとも答へじ。

梅は咲けるに（を）、鶯は來鳴かず。　風は吹きしが、雨は降らざりき。

本を讀み（つゝ／ながら）歩む。　雨降らで風吹く。

右の中、前の　ば　は假定の條件、後の　ば　は確定の條件で、共に順當な接續の意を示し　ど　ども　は確定の條件、とも　は假定の條件で、共に不順當な接續の意を示し、に　を　が　は反對になる意を示し、つゝ　ながら　は動作の同時に起ることを示し、で　は打消の意を示す。

以上文語の動詞の中、確定の　ば　は口語では　ので　から　となり、假定の　とも　は　ても　となり、を　は　に　となり、つゝ　は　ながら　となり、で　は　ないで　又は　ずに　となる。

問ふ（ので／から）答へる。　問うても答へまい。

梅は咲いてゐるのに、鶯は來て鳴かぬ。

本を讀みながらあるく。　雨が降ら（ないで／ずに）風が吹く。

このほかは、大概口語と文語と同じである。

次の文に含まれてゐる助詞を示せ。

(イ) 君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりてこけのむすまで。

(ロ)うめ咲くそのにかすみつゝみねのさくらの花ぐもり、くもりもはてぬおぼろ夜のつきこそはるのひかりなれ。

(ハ)目の前に不用なりとて、妄に物を捨つべからず。諺に、禍も三年立てば用をなす。とさへいへり。

(ニ)勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はゞいかゞ答へん。

(ホ)かくあつてこそ勞働は誠に神聖である。われらの如き門外漢にまでそゞろにその境遇がうらやまれる。(ロ)

(ヘ)上には畏くも民のためとて遠き境に出でましつるほどなれば、いかなる行宮にまし〳〵て、此の風の音に御心をなやましたまふらん。皇太后の宮にはいかにおはしますにか。宮たちも驚きやしたまふらん。

(ト)みがかずば、玉も鏡も何かせん、まなびの道もかくこそありけれ。

次の○○の處に適當な助詞を補へ。

(イ)寒中○○谷川○鳴○とゞめ、老人○炬燵○離れ難し。

(ロ)松○千歳○經○常磐○色○かへじ。

(ハ)庭○雪○犬○足跡○○消えそめて、野○山○やがて元○姿○なる。

(ニ)勉强○○すれ○、どんな事○○出來る。(ロ)

(ホ)孟子○母○、孟子○教育する爲○、三たびその居○遷したり。孟子○他日大儒○なりし○、全く母○教育○よかりし○よるなり。

(ヘ)上根○器用○すき○三つ○中、すき○○物○上手なりけれ。

第二十二章　品詞の轉成

或品詞は其の形のまゝで他の品詞に轉ずることがある。これを品詞の轉成といふ。これに左の種類がある。

轉來の名詞　動詞の連用形、形容詞の語幹、形容詞の連用形が名詞に轉じたもの。

螢の光。　戰の巷。

白の毛布。　赤の頭巾。

轉來の名詞

遠くの親族。　近くの友人。

◎動詞は、通例その連用形から名詞に轉ずる。

轉來の代名詞　名詞が代名詞に轉じたもの。

僕の考。　足下の御說。

私の下駄。　君の靴。

◎御前　御身　弟　わらは　等も、亦此の例である。

轉來の副詞　名詞、動詞の連用形、形容詞の連用形などが副詞に轉じたもの。

朝出で夕歸る。　つまり聯合軍の勝利だ。（口）

早く起き、遲く寢ぬ。

◎形容詞は通例その連用形から副詞に轉ずる。

轉來の接續詞　名詞、動詞の連用形などが接續詞に轉じたもの。

本日缺席仕候間御屆申上候。　秋冷相催候處御起居如何に候か。

智・仁及び勇を三德といふ。

次の文から轉來語を擇び出し、これを說明せよ。

(イ)ゆきは汽車、かへりは汽船。

(ロ)今日雨ふらず明日雨ふらずんば、作物枯れ果てん。

(ハ)母の思は空に滿ち、ゆくへも知らず、はてもなし。

(ニ)あまり大食すると、病を釀す恐がある。

(ホ)祖先の祭をつゝしみ、子孫の敎を嚴にす。

(ヘ)年々歲々花相似たれども、歲々年々人同じからず。

(ト)青・白・赤の三艇は、互にをけじ、劣らじと勇ましく進みたり。

(チ)遠くなり近くなるみの濱千鳥、鳴く音に潮の滿干をぞ知る。

第二十三章　語の構成　その一

語の構成

單純な語が二個以上結びついて一語を作ることを**語の構成**といふ。これに次の四種ある。

疊語

疊語　次の雙柱の例のやうに、同じ語が重なつて一語となつたものをいふ。

木々の梢々に色々の花咲けり。

とく〳〵來れ、いざや子等。

疊語には左の種類がある。

一、疊語の名詞　山々　國々　人々

二、疊語の代名詞　われ〳〵　だれ〳〵

三、疊語の形容詞　長々し　さか〳〵し　なれ〳〵し　花々し

四、疊語の副詞　月々　時々　それ〳〵　追ひ〳〵　恐る〳〵　早々　久々　よく〳〵　尙々　又々

五、疊語の感動詞　いざ〳〵　あはれ〳〵(文)　おや〳〵　まあ〳〵(口)

◎名詞の疊語は、名詞又は副詞として用ひられる。

◎代名詞の疊語は、代名詞又は副詞として用ひられる。

◎動詞の連用形又は終止形の疊語、及び形容詞語幹の疊語は、副詞として用ひられる。

◎形容詞の語幹を重ね、之に　し　の語尾を添へたもの、及び副詞・感動詞を重ねたものは、品詞はかはらないが意味が強くなる。

◎動詞の連用形又は名詞を二つ重ねて、疊語の形容詞に活用させることがある。

◎疊語の形容詞は、すべて第二類の活用になる。

熟語

熟語　左の雙柱の例のやうに、相異なる二個以上の單語が相合して一語となつたものをいふ。

朝日に匂ふ山櫻花。

有り難き仰言に、一門嬉し涙にむせぶ。

熟語には左の種類がある。

一、熟語の名詞　朝日　雨乞　夜寒　書取　織物　待遠　遠淺　淺瀨　長生

二、熟語の動詞　心ざす　成り立つ　近寄る

三、熟語の形容詞　奥ゆかし　有り難し　暑くるし

四、熟語の副詞　俄に　總べて　とくに　たゞに

五、熟語の接續詞　隨って　なかんづく　しかのみならず

◎熟語の名詞を成す要素は、重に名詞、動詞の連用形、形容詞の語幹などである。

◎熟語の名詞には　山櫻花　蚊遣火　食はず嫌ひ　したり顔　などのやうに、三語以上の結合から成るものがある。

連濁
轉音
約音
省音
加音

◎熟語の動詞は、名詞、動詞の連用形又は形容詞の語幹に動詞を結びつけたものである。

◎熟語の形容詞は、名詞、動詞の連用形、又は形容詞の語幹に形容詞を結びつけたものである。

◎熟語の副詞は、多くは名詞・動詞・形容詞又は副詞に助詞を結びつけたものである。

◎熟語の副詞には　ほしいまゝに　やゝもすれば　のやうに、多くの語から成りたつてゐるものがある。

◎熟語の接續詞は、主として動詞と助詞との結びついたもの、又は多くの語の結びついたものである。

數語相合して疊語又は熟語を作るときは、まゝ元の音を變へるものがある。之を分けて連濁・轉音・約音・省音・加音の五つとする。

連濁とは次の語の頭の音の濁ることをいひ、轉音とは、上の語の末

の音の轉ずることをいひ、**約音**とは、二音が約まつて一音となることをいひ、**省音**とは、或音の全く失せることをいひ、**加音**とは、或音の加はることをいふ。

一、連濁　いしはし(石橋)…いしばし。　しかし(然々)…しかじか。

二、轉音　あめと(雨戸)…あまど。　くちわ(口輪)…くつわ。(轡)

三、約音　あのかた(彼方)…あなた。　さしあぐ(差上ぐ)…さゝぐ。(捧ぐ)

四、省音　すみすり(墨磨)…すゞり(硯)　ふみばこ(文箱)…ふばこ。

五、加音　やか(八日)…やうか。　むか(六日)…むいか。

次の語の構成を説明せよ。

様々。足弱。作り話。嬉し涙。長びく。見にくし。素より。さぞ。主として。美々し。おちいる。くれ〳〵も。

次の文から疊語及び熟語を擇び出せ。

(イ)時々刻々、バルチツク艦隊見ゆとの無線電信を待つ。

(ロ)東の障子明放ちたるところより見下せば、みづ〳〵しき稲田の彼方暮れ行く濱邊の家々を隔てゝ、白帆漸く消え、漁火次第に鮮かなり。

(ハ)新綠の頃の青々と晴れた空には高い木立や茂つた竹林などが最もよく折合つて見える。

(ニ)古の奈良の都の八重櫻、今日九重に匂ひぬるかな。

(ホ)うれし、舟の旅、うかぶ鷗、たつ千鳥。あれ〳〵波間に見よ見よ岩間に。山々浦々、沖漕ぐ釣舟、ゐながらに見つゝぞゆく。

(ヘ)富士の中腹に群がる雲は黃金色に染まつて、見るがうちに樣々の形に變ずる。連山の頂は白銀の鎖の樣な雲が次第に北に走つて、終には暗憺たる雲のうちに沒してしまふ。

(ト)年七十に垂んとして、一歲の行萬哩を期し、節冬寒に向ひ、北滿の野に見學す。忠君愛國の至情に出づるに非ずんば、孰か能く此の如くならん。

第二十四章　語の構成　その二

接頭語

接頭語

左の雙柱の語のやうに、或語の頭につく獨立しない語をいふ。

うひ陣の功名せよ。　一刀をたばさみてかけ出す。

風采が頗るけ高い。　身體が何處となくか弱い。

今おもな接頭語を左に示さう。

い……います。　いや…いやます。　うひ…うひ產。

え せ…えせ歌。　お……お庭。　おん…おん心。

か……か黑し。　き……き絲。　け……け高し。

さ……さ迷ふ。　す……す足。　た……た易し。

ひが…ひが目。　ほの…ほの見ゆ。　ま……ま心。

み……み吉野。　を……を田。

接尾語

接尾語

左の雙柱の語のやうに、或語の下につく獨立しない語をいふ。

友だちと樂しげに遊ぶ。

木の葉黃ばむ。

今重な接尾語を左に示さう。

一、體言の下について、複數または數の多いことを示すもの。

ども…我々ども。　ら……かれら。　がた…あなたがた。

たち…君たち。　ばら…奴ばら。

二、形容詞の語幹について名詞を作るもの。

さ…長さ。嬉しさ。　み…深み。樂しみ。　げ…重げ。嬉しげ。

三、名詞、形容詞の語幹等について動詞を作るもの。

めく…時めく。（か行四段）　なふ…伴なふ。（は行四段）　む……樂しむ。（ま行四段）

ばむ…黃ばむ。（ま行四段）　がる…悲しがる。（ら行四段）　まる…高まる。（ら行四段）

ぶ……古ぶ。（ば行上二段）　さぶ……神さぶ（ば行上二段）

四、名詞について形容詞を作るもの。

けし……静けし（第一類）　らし……馬鹿らし（第二類）

がまし……をこがまし（第二類）

五、體言・動詞等について副詞を作るもの。

がてら……花見がてら。

かた〳〵……報知かた〳〵。　すがら……道すがら。

づつ……少しづつ。　ばかり……寢るばかり。

まに〳〵……思ふまに〳〵。

◎まに〳〵は、略してまゝにともいふ。

次の文の疊語・熟語・接頭語・接尾語を指摘せよ

(イ)目に青葉、山ほとゝぎす、初鰹。

(ロ)足の痛みは異ならねど、頭の重さはやゝ薄らぎたり。

(ハ)同じ自然の御母の御手に育ちし姉と妹、み空の花を星といひ、わが世の星を花といふ。

(ニ)燈火の光、晴れたる夜の星にまがひていと涼しげなるに、たなびく空の絶間より夕日の影花やかに匂ひ出でたる、いとをかし。

(ホ)友だち來れ、われら、が友、とく〳〵來れ、いざやこら。

(ヘ)追々夜寒になるゆゑ、皆々薄著を戒むべし。

(ト)氣候も大きに春めきたれば、近日二三の友だちと共に彼をおとなはん。

(チ)幸に風は追手。帆を張つていよ〳〵洞庭湖の中に乘り入らうとする。夕日はいつしか二つの小島の間に落ちて、見る〳〵深紅の眞玉が湖の中に沈む。

(リ)向ふを望むと、はるかの磯邊に人の姿が唯一つちら〳〵と見える。氣をつけて見たが、人間に相違ない。一同は狂喜して駈け行かうとしたが、脚下の懸崖を下るべきやうがないのに困じ果てた。喉を限に呼んで見たが、聲が

屆かぬ。それから蔓や木の根にとりすがりつゝ、かれこれと工夫してやうやく山坂を下つて行くと、彼方も見つけて、手招して道を敎へ、出迎へて一禮した。

後篇

第一章　動詞と助動詞との接續　その一

動詞の未然形に續く助動詞

動詞の未然形に續く助動詞

(い)むずざりじまししむまほしはすべての動詞の未然形に續く。

四……誘はら變……有ら
な變……死な
か變……來コ
さ變……爲セ
上二……起き
下二……捨て

むずざりじましは

……花見に友人を誘はむ。
……友人と花を上野に見む。
……老いず死なずの樂もがな。
……彼は終に訪ひ來ざりき。
……不孝の振舞をばせじ。
……明日も恐らくは降雨有らじ。
……明朝は五時に起きまし。

上一……見
下一……蹴

しむ……下女に塵を捨てしむ。
まほし……早く見まほし。

◎あ行下二段の動詞　得ウ　の未然形　得エ　に　しむ　を添へて　得しむ　といふべきを　得せしむ　といふことは、中古文の法則ではないが、今は許容されてゐる。

◎上一段活用の未然形　著　似　干　見　射　居　に　しむ　を添へて　著しむ　見しむ　などいふべきを、著せしむ　見せしむ　などいふものがある。此等は何れも誤である。

(ろ)る　す　は、四段・ら行變格・な行變格の動詞の未然形につゞき、
らる　さす　は、その外の動詞の未然形につゞき、り　は、さ行變格の動詞に限つてその未然形につゞく。

四……誘は
ら變……居ら

る……花見に誘はる。
父上は宅に居らる。

な變……死な
か變……來
さ變……爲
上二……起き
下二……捨て
上一……見
下一……蹴

す……潔く死なす。
らる……先生、宅に來らる。
大いに滿足せらる。
馬丁、馬に蹴らる。
さす……毎朝五時に子供を起きさす。
下女に塵を捨てさす。
弟に郵便受の中を見さす。
さ變……爲
り……大いに滿足せり。

◎さ行變格の未然形に　らる　さす　を添へて「出席せらる。」「掃除せさす。」などいふべきを、「出席さる。」「掃除さす。」などいふことがある。これは中古文の法則ではないが、今は許容されてゐる。

(は)口語の助動詞　う　れる　せる　は四段活用の動詞の未然形に續き、よう　られる　させる　まい　は四段以外の動詞の

未然形に續き、ぬ　ない　は總ての動詞の未然形に續く。

四……誘は　居ら　死な
　　う　れる　せる　ぬ　ない

か變……來　さ變……爲
　　よう　られる　させる　まい　ぬ　ない

上一……起　見
下一……捨て　蹴

花見に誘はれる。
明日は宅に居らう。
潔く死なせる。
今日は來よう。
馬に蹴られる。
下女に塵を捨てさせる。
穢はしいものを見まい。
六時が鳴つてもまだ起きぬ。
惡戯をせぬ。
惡戯をしない。

◎ぬ　は、さ行變格の未然形　せ　につゞき、ない　はその　し　につづく。

◎よう　まい　は、さ行變格では未然形　し　につゞいて、次のやうになる。せ　には續かぬ。

しよう。しまい。

◎られる　させる　は、さ行變格の未然形につゞく時には、約まつて、次のやうになる。

せられる。　せさせる。

次の文の○○の處に適當な助動詞を挿入せよ。

(イ)先生生徒をして本を閉ぢ○○。
(ロ)今日は風が烈しいから、海が荒れ○○。(日)
(ハ)かの演說は來賓一同に傾聽せ○○たり
(ニ)早く目的の地に着か○○。
(ホ)知ら○○を知ら○とせよ。

次の文の中に中古文の法則に合しないところや、誤つたところがあつたら、之を

示せ。

(イ)朋友に尊敬さるゝ人こそ羨ましけれ。
(ロ)請ふ我をして一言するを得せしめよ。
(ハ)小使に門前の掃除をさす。
(ニ)義經、那須與市をして扇眼を射せしむ。
(ホ)通券御持の方は東の入口より入場さるべし。

第二章　動詞と助動詞との接續　その二

動詞の連用形に續く助動詞

動詞の連用形に續く助動詞

けり　つ　たり(完了)　けむ　たし　は總べての動詞の連用形に續き、ぬ(完了)は、な行變格以外の動詞の連用形につゞき、き　は、か行變格以外の動詞の連用形につゞく。

な變……死に
四……咲き
ら變……有り
か變……來
さ變……爲
上二……起き
下二　……捨て
上一……見
下一……蹴

ぬ……花咲きぬ。塵を捨てぬ。
き……戰ひて死にき。
けり……花咲きけり。早朝に起きけり。
つ……友人遊びに來つ。
たり……公園に散歩したり。
けむ……いづこに捨てけむ。
たし……博覽會を見たし。ボールを蹴たし。

◎完了の　ぬ　はな行變格にはつゞかぬ。

き　はか行・さ行の兩變格に續く時には、次のやうな續き方をする。

未然……こ　し……こし　方行末。
しか……こしかど行かざりき。

か變……「來」
連用……き　し……きし方行末。
しか……きしかど行かざりき。

さ變……「爲」
未然……せ　し……遠足せし事あり。
しか……遠足せしかど疲れざりき。
連用……しき……遠足しき。

◎さ行變格では、「せし事」「感ぜしかば」のやうに、未然形に　し　をつける。「しゝ事」「感じし話」のやうに、連用形に續けてはならぬ。

◎四段活用は、さ行でも、矢張「爲しゝ事」「盡しゝ人」と連用形につゞけるのが中古文の法則である。しかし、今は「爲せし事」「盡せし人」のやうにいふことも許容されてゐる。

口語の　た（過去完了）　ます　たい　はすべての動詞の連用形に續く。

四……咲き（い）　花が咲いた。
　　有り（ら）
　　た（だ）……友人が來た。

死に（ん）
か變……來（キ）
さ變……爲（シ）
上一……起き
下一……見　捨て
蹴

友人が死んだ。
机が有ります。
五時に起きます。
ボールを蹴ます。
勉强をしたい。
相撲が見たい。
塵を捨てたい。

次の文の○○の處に適當な動詞の語尾を挿入せよ。

（イ）書物は學校に置○ぬ。
（ロ）昨朝神戸を出發○き。
（ハ）いたづらにすご○し月日こそ惜しけれ。
（ニ）これ我が最も愉快に感○し一事なり。
（ホ）みづから爲○しことに責任を免るな。

次の句の中に中古文の法則に合はぬところや、誤つたところがあつたら、之を改

めよ。

費せし金。講じし本。著ならせし衣。言ひ出せし折。語りつくしゝ時。

第三章　動詞と助動詞との接續　その三

動詞の終止形に續く助動詞

動詞の終止形に續く助動詞

(い)まじ　らむ　らし　べし　べかり　めり　なり(詠歎)　は、ら行變格以外の動詞の終止形に續く。

四……咲く
な變……死ぬ
か變……來ク
さ變……爲ス
上二……起く
下二……捨つ

まじ……今日は訪ひ來まじ。
　　廢物たりとも捨つまじ。
らむ……花や咲くらむ。
らし……馬、人を蹴るらし。
べし……朝は早く起くべし。
べかり……死ぬべかりし命をながらふ。

上一……見る
下一……蹴る

めり……彼は此方を見るめり。
なり(詠歎)……秋の野に人まつ蟲の聲すなり。

◎ら行變格の動詞に限つて、その連體形から　まじ　らむ　らし　べし　べかり　めり　なり　を受ける。

(ろ)口語の　らしい　は總ての動詞の終止形に續き、まい　は四段活用の動詞の終止形に續く。

か變……來ク
さ變……爲ス
上一……起きる
　　見る
下一……捨てる
　　蹴る

らしい
尋ねて來るらしい。
上京するらしい。
早く起きるらしい。
景色を見るらしい。
廢物などは惜まず捨てるらしい。
あの荒馬はよく馬丁を蹴るらしい。

四……咲く／死ぬ／有る　まい／らしい

花は咲くまい。
まだ死ぬまい。
そんな事は有るまい。
もう死ぬらしい。

◎まい　は、四段活用以外の動詞には、その未然形に續く。

次の文に於ける助動詞の接續の誤を正せ。

(イ)此の品に手を觸るゝべからず。
(ロ)此の處に塵芥を捨てべからず。
(ハ)彼は毎夜深更まで勉强するらし。
(ニ)不都合の事なきやうこゝろえべし。
(ホ)去りたきものは去るべく、來たきものは來るべし。
(ヘ)今日は雨も降るまい。風も吹かまい。
(ト)富士山頂の雪は夏も絶えまじ。

動詞の連體形に續く助動詞

第四章　動詞と助動詞との接續　その四

動詞の連體形に續く助動詞

(い)なり(指定)　ごとし　は總べての動詞の連體形につゞき、まじ　らむ　らし　べし　べかり　めり　は、ら行變格の動詞に限つてその連體形に續く。

四……咲く／な變……死ぬ／ら變……有る／か變……來る／さ變……爲る／上二……起くる／下二……捨つる　なり／ごとし

深山の奥の花も咲くなり。
運動も勉强もするなり。
朝は五時に起くるなり。
魚の水有るごとし。
弊履を捨つるごとし。

上一……見る
下一……蹴る
（その様目に見るごとし。）

まじ……さることはあるまじ。
らむ……如何なる理由にかあるらむ。
らし……燒死せるものもあるらし。
ら變……有る
べし……泣くものもあるべし。
べかり……さもあるべかりき。
めり……淋しくもあるめり。

◎ごとし　は　の　を媒として名詞・代名詞に續き、が　を媒として動詞・形容詞の連體形に續く。

月光鏡のごとし。　落花蝶の舞ふがごとし。
環の端なきがごとし。　良賈は深く藏して虛しきがごとし。

◎詠歎の　なり　は動詞の終止形に續き、指定の　なり　はその連體形に續く。

（ろ）口語の　だ　です　は助詞　の　を媒として動詞の連體形に續く。

四……有る／死ぬ／咲く
か變……來る
さ變……爲る
上一……起きる／見る
下一……捨てる／蹴る
（の）だ。
（の）です。

明日は試驗が有るのだ。／のです。
正直だから店が繁昌するのだ。／のです。
忙しいから朝早く起きるのだ。／のです。

◎だらう　でせう　などにつゞくときは　の　を省くことがある。

動詞の已然形に續く助動詞

動詞の已然形に續く助動詞

り は四段活用の動詞に限つてその已然形に續く。

花美しく咲けり。　家大いに富めり。

◎り がさ行變格の動詞の未然形に續くことは前にいつた通りである。

◎り をな行變格　死ぬ　の命令形　死ね　に續けて　死ねり　とすること、及び、ら行變格　居り　異なり　の已然形　居れ　異なれ　に續けて　居れり　異なれり　とすることは、中古文の法則ではないが、今は許容されてゐる。但し　往ねり　侍れり　流れり　などといふのは許容されぬ。

次の文に於ける助動詞の接續法を説明せよ。

(イ)男のすなる日記といふものを女もして見んとてするなり。

(ロ)同じ路を引きかへすのは愚である。迷つた處で、今の武藏野に過ぎない。

まさかに行き暮れて困ることはあるまい。(ロ)

(ハ)朝な〳〵飯食ふごとに忘れじな、惠まぬ民に惠まるゝ身は。

(ニ)かゝる小さき舟にて廣き海を渡らんこと、父母あるものゝ爲すべき事かと怪しみ迷ひけるが、旅人は皆これにて渡る習なりといふに、聊か心强くなりて遂に乘り込みたり。

(ホ)亂れ飛んでは、このごろの曇り勝の空に何の星かと疑はれ、叢に集つては、時ならぬに何の花かと怪しまれる。(ロ)

第五章　助動詞相互の接續

これまでは、主として一助動詞の動詞に續く場合について述べて來たが、實際には一助動詞が添はつたばかりでは十分に自分の思想を盡しにくい場合が多い。かやうな場合には、幾つかの助動詞を接續させて思ふことをつくす。次の雙柱の例を見よ。

人はその放心を收めんこと肝要なるべし。

燈火の發明されなかつた太古の世には、螢は隨分廣く燈火の代用をつとめたものではありますまいか。

すべて助動詞は、たとひ數語相連續しても、その固有の意味を失はぬものであるから、先づその一つ〳〵の意味を明かにし、さて後に全體の意味を考へ定めるがよい。

例へば前例の「肝要なるべし。」は名詞　肝要　に指定助動詞の　なる　と推量助動詞の　べし　とを接續したもの、「發明されなかつた」は、動詞　發明せ　に可能の助動詞　られ（せられ）　と否定の助動詞　なかつ　と過去の助動詞　た　とを接續したもの、「ありますまい」は動詞　あり　に對話の助動詞　ます　と推量の助動詞　まい　とを接續したものであることを知つて、さて後に全文の意味を明かに考へ定める類である。

助動詞と助動詞との接續に關する一般法則

◎てむ　は未來完了の形だが完了の希望を示す意となる。それゆゑ、「疾く往きてむ。」といへば、疾く往つてしまひたい。といふ意となる。

助動詞と助動詞とを接續する方法は、概ね動詞と助動詞とを接續する方法と同じである。

例へば前例の「肝要なるべし」の　べし　は、ら行變格動詞の連體形に續く助動詞だから、又、これと同じ活用をする助動詞　なり（指定）　の連體形　なる　につゞく類である。

次の文に於ける動詞・助動詞の接續を說明せよ。

(イ)若し懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。

(ロ)此の兒文才あり、いかにも師を擇びて學ばしめらるべし。

(ハ)臥床に入りやせまし、入らずやあらましなどたゆたひつゝ書を讀む。

(ニ)おしなべてみのりよしと聞きつる千町田の稻も、吹きそこなはれつらんや　など思ひわづらひたまふ。

(ホ)二十一年十月に至りて、內外の飾までも悉くとゝのほりて、天つ日嗣の常宮

と定めたまはんに足らはぬことなくなりにしかば、そがいたづきを空しうなさじとて、速かにうつろはせ給はんことをおもほし立たせたまへるなるべし。

(ヘ)世に處するには、どんな難事に出會つても臆してはいかぬ。何でも大膽にかゝらなければならぬ。どうしようか、かうしようかと躊躇するやうになつては、もういかぬ。むづかしからうが、たやすからうが、斷然遂行するに限る。(ロ)

(ト)世の人は上野・淺草・團子坂とうかるめり。我も出でなんや、出でなん。病の募らば募れ。待たばとて、出でらるゝ日の來るにもあらばこそ。

假定のば‖
確定のば‖

第六章　用言と助詞との接續　その一

假定のば‖と確定のば‖

假定の　ば‖　は動詞・形容詞・助動詞の未然形に添ひ、確定の　ば‖　は、その已然形に添ふ。而して此等は何れもその條件の下に起る事實の順當なことをあらはす。

假定のば‖

風吹かば‖、波立たむ。

天氣よくば‖、散歩せむ。

知らずば‖、往きて問へ。

確定のば‖

風吹けば‖、波立つ。立たむ。

天氣よければ‖、散歩す。散歩せむ。

知らざれば‖、往きて問ふ。問はむ。

◎假定の條件に應ずる說明語は通例假定であるが、まゝ確定の說明語を用ひることがある。

十日が日曜日ならば‖十五日は金曜日なり。

◎命令の語は、假定の說明語と見做す。

◎確定の條件に應ずる說明語は、確定・假定の何れをも用ひる。

口語では、動詞・形容詞・助動詞の假定形に　ば‖　を添へて假定の條

件を示し、その終止形に　ので　又は　から　を添へて確定の條件を示す。

假定の場合

風が吹けば、波が立たう。

天氣がよければ、散歩しよう。

知らなければ、往つて問へ。

確定の場合

風が吹くので、波が（立つ・立たう）。

天氣がよいから、散歩（する・しよう）。

知らないから、往つて（問ふ・問はう）。

假定のと・ともと確定のど・ども

假定の　と　とも　は動詞及び動詞のやうに活用する助動詞の終止形、形容詞及び形容詞のやうに活用する助動詞の未然形に添ひ、確定の　ど　ども　は動詞・形容詞・助動詞の已然形に添ふ。而して此等は何れもその條件の下に

假定のと・とも
確定のど・ども

起る事實の順當ならぬ意をあらはす。

假定の　と　とも

繪にかくと、筆も及ばじ。

乞ふとも、與へじ。

笑はるとも、忍ばむ。

悲しくとも、泣くな。

見たくとも、見るまじ。

確定の　ど　ども

繪にかけど（ども）、筆も及ばず。

乞へど（ども）、與へず。

笑はるれど（ども）、忍ぶ。

悲しけれど（ども）、泣かず。

見たけれど（ども）、見ず。

◎とも を動詞・助動詞の連體形に添へて、「問はるゝとも答ふまじ」「悔ゆるとも詮なからむ」のやうにいふことがある。中古文の法則ではないが、今は許容されてゐる。

◎とも　を形容詞の終止形に添へて、「高しとも」「嬉しとも」などといつて條件の意味に用ひるのは誤である。

◎とも　ども　の二語の代りに　も　を連體形に連ねて、「如何なる理由あるも(ありとも)返付せず。」「春は來たるも(來たれども)花は未だ咲かず。」のやうにいふことがある。しかし誤解を生ずる恐のある場合には用ひぬがよい。例へば「代價は安きも我々には不用なり。」の「安きも」は「安けれども」と「安くとも」との兩義に解し得られるから、これを避ける類である。

と　とも　は口語で　ても　ともなる。ど　ども　は口語も文語も同じである。

ても　の例(假定)　　ど　ども　の例(確定)

乞うても與へまい。　　乞ふけれど(ども)與へない。

笑はれても、忍ばう。　　笑はれるけれど(ども)、こらへる。

悲しくとも、泣くな。　　悲しいけれど(ども)、泣かぬ。

見たくても、見まい。　　見たいけれど(ども)、見ない。

◎「乞ふけれども」「笑はれるけれども」などのやうに動詞の下に來る「けれ」は、下の　ど　ども　と合せて　けれど　けれども　を一つの助詞と見做す。

次の文に中古文の法則に合せぬところや、誤つたところがあつたら、之を改めよ。

(イ)勉强せば、賢き人となる。

(ロ)松は千歳を經るとも、常磐の色をかへじ。

(ハ)都合あしくとも約束をば違へず。

(ニ)都合あしけれども約束をば違へじ。

(ホ)鸚鵡はよくいふも、鳥たるを免れず。
(ヘ)たとひ討死するとも、その場をな退きそ。
(ト)御寸暇もこれ有り候へば、御來車下されたく候。
(チ)無事に暮し居り候はゞ、御安心下さるべく候。

次の○○の處に助詞を挿入せよ。又、各の文を口語に改めよ。

(イ)善を爲○は、人に敬はれん。
(ロ)人は怒るとも、我は怒(る○○。ら○。)
(ハ)笑はるれ(○、○○、)顧みず。
(ニ)道遠ければ、車にて行○。
(ホ)みめ形いかに美し、く○○、心さま正しからぬ○ば、善き人とは言はれ○。

第七章　用言と助詞との接續　その二

禁止のな

な　は、ら行變格の動詞の連體形、その他の動詞の終止形、及び受身・使役等の助動詞の終止形に添ふ。

ら變…有る　一な
四……泣く
な變…死ぬ
か變…來
さ變…爲ス
上二…起く
下二…捨つ
上一…見る
下一…蹴る　な

決して御心配有るな。
めゝしさうに泣くな。
徒に死ぬな。
こゝに來な。
すまじきことをするな。
病をおして起くな。
こゝに塵を捨つな。
非禮のものを見るな。
みだりにボールを蹴るな。
心を外物に奪はるな。(受身)
馬に蹴らるな。(受身)
外欲に我が心を奪はす(な。(使役))
ゆめ〳〵他人に見さす(な。(使役))

受身…奪はる
蹴らる　な

使役…奪は(す
しむ)
見(さす
しむ)　な

禁止のな……そ

◎「こゝに塵をすつるな。」「よそみをするな。」などいふは誤である。

◎「塵をすつるなかれ。」「よそみをするなかれ。」などの「なかれ」は前のなのやうに禁止の意を示すけれど、これは　なくあれ　の約まつたもので、禁止の　な　とはその品詞がちがふ。

◎な　は口語でも用ひる。但し、有るな　泣くな　捨てるな　奪はれるな　蹴させるな　のやうに、口語ではすべて終止段に添ふ。

禁止のな……そ　な……そ　は通例その中間に動詞の連用形を挿む。但しか行・さ行兩變格の動詞に限つてその未然形を挿む。これも亦一種の助詞と見做してよい。

四段　泣き　ら變　有り　な變　死に　上二　起き　な　そ。

か變　さ變　な　來　爲　そ

下二　捨て
上一　見
下一　蹴

◎な　そ　の間に助動詞の添つた動詞を挿むときにも、亦前の法則を適用する。

な泣かしめそ。
な行かせたまひそ。
な來させそ。

を・が・に・つゝ・ながら・で・のみ・ばかり・まで　を　が　に　は動詞・助動詞・形容詞の連體形に添ひ、つゝ　ながら　は動詞・助動詞の連用形に添ひ、で　はその未然形に添ひ、のみ　ばかり　まで　は名詞・代名詞・副詞並に動詞・助動詞の連體形に添ふ。

を　が　に　つゝ　ながら　で　のみ　ばかり　まで

を……
文　雨の降るを、傘さゝで出で行きぬ。
口　雨の降るのに傘をさゝないで出ていつた。

が……
文　雪は降れるが、割合に暖かなりき。
口　雪は降つたが、割合に暖かだつた。

に……
文　天の寒きに一着の綿衣だになし。
口　天の寒いのに、一着の綿入さへもない。

つゝながら……
文　四方の景色を眺めつゝながら歩む。
口　四方の景色を眺めながらあるく。

文　攻撃せしめつゝながら前進す。
口　攻撃させながら前進する。

で……
文　何事をもなさで日を過す。
口　何事をもしないで日を過す。

同時に二動作をあらはす
眺める一方で歩を
片方では、しつ、ある

文　馬に蹴られで仕合なりき。
口　馬に蹴られないで仕合であつた。

のみ……
文　たゞ一椀の粥をすゝるのみなり。
口　たゞ一椀の粥をすゝるばかりだ。

ばかり……
文　行かんといひしばかりなり。
口　いかうといつたばかりだ。

まで……
文　さまで心を勞するに及ばじ。
口　それほどまでに心を勞するには及ぶまい。

◎つゝは時として**動作の反復繼續**を表はすに用ひられる。

心に慕ひつゝも、相見る機會を得ざりき。

日毎に叱られつゝ、憂き月日を過しけり。

次の文に於ける用言と助詞との接續を說明せよ。

(イ)吹く風をなこその關と思へども、道もせに散る山櫻かな。

(ロ)泰時運盡きたちば、鐵の築地を築くとも、助かり候はじ。運ありて君に仕ふべくば、これにて事足り候ふべし。

次の文に誤があつたら正せ。

(イ)秋茄子嫁にくはせな

(ロ)此の溝の中に塵をすてな。(ロ)

(ハ)友がり訪ふとも、長居するな。

(ニ)友がり訪ふとも、な長居せ給ひそ。

(ホ)惡しき事は決してするな。

(ヘ)わきみな爲せそ。妄言なしそ。

第八章　用言と助詞との接續　その三

並列のと‖と指定のと‖

並列の　と‖　と指定の　と‖　とは、共に本來體言に添ふ助詞であるけれども、動詞・助動詞・形容詞にも添ふことがある。この場合には、並列の　と‖　はその連體形に添ひ、指定の　と‖　は終止形と連體形と已然形と命令形とを問はず、すべて文の切れめに添ふ。これは前者は連體形の下にあるべき名詞を略したもの、後者は　と‖　から上の句を一體言と見做したものである。

一、並列のと‖

知る(人)と知らざる(人)と‖を問はず、皆彼の死を悼む。

彼は學の博き(コト)と德の高き(コト)と‖を以て衆に推さる。

二、指定のと‖

終止形に添ふ例

善に善報あり‖と古人もいへり。

花咲きぬ‖と告げ越す。

物言へば唇寒し‖と芭蕉翁もいへり。

連體形に添ふ例
- 人やあると問ふ。
- 花なむ咲きぬると告げ越す。
- 春や疾き、花や遲きと聞き分かん。

已然形に添ふ例
- 家こそ榮ゆれとことほぐ。
- 花こそ咲きつれと告げ越す。
- 祝ふ今日こそ樂しけれと生徒唱ふ。

命令形等に添ふ例
- 急がばまはれといふ諺あり。
- ゆめ人を侮るなと戒めたまふ。
- 人に重んぜられよと諭したまふ。

疑問のや・か

や は動詞・助動詞・形容詞の終止形に添ひ、か はその連體形に添ふ。

- 有りや、無しや。　ありきや、なかりきや。
- 有るか、無きか。　有りしか、無かりしか。

疑問のや・か

◎中古文の法則は前述の通りであるが、現今は往々「有るや、無きや。」「有りしや、無かりしや。」のやうに や を連體形に添へても用ひる。

◎や か は共に疑の意に用ひられるけれど、誰 何 いづれ のやうな疑の語が上にあるときは、や を用ひないで か を用ひるのが中古文の法則である。

汝は何事を思ふか。　今日は幾日なるか。
春と秋といづれがよきか。

但し現今は「何事を思ふや。」「幾日なりや。」「いづれがよきや。」のやうに、かやうな場合にも亦 や を用ひるものがある。

口語では疑問を示すに か を用ひて や を用ひない。且必ず之を文の終に添へる。

人がをるか。　花が咲いたか。　春が早いか、花が遲いか。

反語のや・か

や　か　は又疑問の意から轉じて反語となる。

豈悲しむに足らんや。

誰をか恨みん。

反語のやは・かは

◎や　か　に感動詞の　は　を加へた　やは　かは　も亦反語となる。

我やは花に手だにふれたる。いかで悲み歎くべきかは。

次の文の　と　の用法及び續き方を説明せよ。

(イ)取ると取らざるとは汝にまかす。

(ロ)古語に曰く、妖は德に勝たずと。

(ハ)寢よとの鐘の音枕にひゞく。

次の文に中古文の法則に違つたところや誤つたところがあつたらば、それを指摘せよ。

(イ)君は此の間に答へ得るや、得ずや。

(ロ)汝は如何に感ぜしや。

なの識別

(ハ)果して然るや否やを知らず。

(ニ)嗚呼また何をやいはん。

(ホ)此の事は如何に處理して可なるべきや。

第九章　誤り易い品詞

同形異義の助動詞たる指定の　なり　と詠歎の　なり、指定の　たり　と完了の　たり、過去の　けり　と詠歎の　けり、打消の　ぬ　ね　と完了の　ぬ　ね　はとかく誤り易いが、その區別並に他の品詞への續き方は、前に述べた。此等の助動詞の外にも、尙その形が同じで其の意味のちがふ助動詞・助詞・感動詞等がある。今左にその識別法を述べよう。

一　な　の識別

な　には(一)完了助動詞　ぬ　の未然形　な　と、(二)禁止の　な

と、(三)感動詞の　な　とある。(一)は動詞・助動詞の連用形から受け、(二)は動詞・助動詞の終止形から受け、(三)は動詞・助動詞・形容詞の終止形から受ける。

一花咲きなば、見に行かむ。

二あるじなしとて春を忘るな。

三花の色はうつりにけりな。

なむの識別

二　なむ　の識別

なむ　には(一)未來完了の　な　む　と、(二)助詞の　なむ　と(三)感動詞の　なむ　とある。(一)は完了の助動詞　ぬ　の未然形　な　に未來の　む　を加へたもので、動詞・助動詞の連用形から受ける。(二)は用言の連體形・體言・助詞等から受け、下を動詞・形容詞・助動詞の連體形で結ぶ。(三)は動詞・助動詞の未然形から受け、希望の意を示す。

にの識別

一花の散りなむ後ぞこひしかるべき。

二花の散るなむ惜しき。

三草葉の上はよきて吹かなむ。

◎此等の　なむ　は、通例、皆、發音のまゝに　なん　と書く。

三　に　の識別

に　には(一)完了助動詞　ぬ　の連用形　に　と、(二)位置を示す助詞の　に　と、(三)反對の意を示す助詞の　に　とある。(一)は動詞・助動詞の連用形から受け、(二)は體言又は用言の連體形から受け、(三)は用言の連體形から受ける。

一またこそ參り候はめとて歸りにけり。

二うれしきにもかなしきにも思ひ出づ。

三夜の明けたるに、何とて起き出でざる。

◎右の外「降りに降る。」「急ぎに急ぐ。」のやうに、動詞の連用形を受け、下に同じ動詞を重ねて、その意味を強める助詞の　に　もある。

四　し　の識別

し　には(一)過去の助動詞　き　の連體形　し　と、助詞の　し　とある。(一)はか行變格の未然・連用の二形、さ行變格の未然形その他の活用の連用形から受け、(二)は種々の語から受ける。

一　來し方行く末の事もおもひやらる。
　　搜索せしが、見當らざりき。
二　烈しと聞きし嵐の音も、夜半の夢となりぬ。
　　頃しも、秋の最中なりき。
　　さる事なきにしもあらず。

五　ばや　の識別

ばや　には一確定の助詞　ば　に疑問の助詞　や　を添へた　ばや　と、(二)假定の助詞　ば　に疑問の助詞　や　を添へた　ばや　と、(三)感動詞の　ばや　とある。(一)は動詞・助動詞の已然形から受け、(二)・(三)は共にその未然形より受ける。

一　紅葉すればや照りまさるらむ。
二　心あてに折らばや折らむ。
三　時鳥まだしきほどの聲を聞かばや。

六　は　が　を　も　や　か　の識別

これに(一)助詞のと(二)感動詞のとある。

は　一　善は急げ。　　こは何事ぞ。(差別)
　　二　吾妻はや。　　何かは悲しからざらむ。(感歎)

一　我が國。梅が枝。(所有)
　　華が散る難波の國。(主語)

が
　二　字は書きしが、畫はかゝざりき。（反對）
　　そことも知らぬ旅寢してしが。（希望）

◎感動詞の　が　は　がな　と同じやうに希望の意を示す。

を
　一　學を修め、業を習ふ。（目的）
　　山を登り、川を渡る。（場所）
　二　花の盛にあはましものを。（反對）
　　八重垣つくる、その八重垣を。（感歎）
　　音をのみぞ鳴く。（感歎）

も
　一　學も博く、德も高し。（一致）
　　風はいかに強きも農作を害するに至らず。（不順當）
　　字は書きたるも、畫はかゝざりき。（不順當）
　二　あはれかなしも。（感歎）
　　待たずしもあらず。（感歎）

や
　一　わが思ふ人はありやなしや。（疑問）
　二　あなおもしろの春雨や。（感歎）
　　雲か、山か、吳か、越か。（疑問）

か
　一　人誰か生を欲せざらむ。（反語）
　二　白露を玉にもぬける春の柳か。（感歎）

◎感動詞の　か　は　かな　の意である。

次の文の雙柱を施した語の異同を說け。

（イ）祈らずとても神や守らむ。
　　今を春べと咲くやこの花。

（ロ）雨降らなむ。
　　雨降りなむ。
　　雨なむ降る。

（ハ）忘れじな。
　　我を忘るな。

忘れなば問へ。
な忘れそ。

(ニ)
いはぬが花。
花も咲きぬ。

(ホ)
生きとし生けるもの。
生き殘りしもの。

(ヘ)
木枯吹きに吹く。
山に嘉木あり、海に珍魚あり。
春過ぎて夏來にけらし。
人々の守り居るに猫は魚を奪ひ去りぬ。
白露の色は一つを如何にして
　木々の木の葉を千々に染むらむ。

(ト)
秋の田の刈穂のいほの苫をあらみ、
　我が衣手は露にぬれつゝ。

文の成分
主語
説明語

これやこの行くもかへるもわかれては、
　知るも知らぬも逢坂の關。

(チ)
ものをいふもくゞもり聲にひゞきて聞えず。
色よりも香こそあはれと思ほゆれ、
　たが袖ふれし宿の梅ぞも。

第十章　文の成分

文を組み立てるものは何れも語であるけれと、その職分の上から見るとおのづから數種に分れる。これを**文の成分**といふ。

主語　説明語　主語とは、文の題目となる語、卽ち説明される語をいひ、説明語とは、主語たる事物を説明する語をいふ。

鳥　鳴く。　花　散る。　これは　よし。　かれは　あし。

前例の　鳥　花　これは　かれは　は主語、鳴く　散る　よし　あし　は説明語である。

主語の成立

主語は重に名詞・代名詞を用ひ、説明語は重に動詞・形容詞を用ひる。但し、名詞・代名詞に助詞を添へ、動詞・形容詞に助動詞・助詞等を添へることのあるのは勿論である。

春雨（主）　降りやまず（説）。　秋（主）は　來にけり（説）。

それこそ（主）　よからめ（説）。

◎助詞　ぞ　か　で終るものは助動詞「ナル」を省略したものと見てよい。

こは何事（ナル）ぞ。　汝は誰（ナル）か。

客語

客語　客語とは、他動詞を説明語としてゐる文に於て、その目的を示す語をいふ。

太郎紙鳶を揚ぐ。　余は汝を愛す。

右の文の　太郎　余は　は主語、揚ぐ　愛す　は説明語であるけれど、揚ぐ　愛す　は他動詞であるから、單に「太郎揚ぐ」「余は愛す。」といつたばかりでは文意が明かでない。動作の目的物たる　紙鳶を　汝を　を加へて、其の意味が始めて全くなる。此の目的物たる　紙鳶を　汝を　は、即ち此の文に於ける客語である。

客語の成立

◎客語は名詞又は代名詞から成り、通例　を　といふ助詞を伴ふ。但し、まゝ　を　の省かれることもある。

補語

補語　補語とは、主語・説明語・客語の外で、文意を全うする上に必要な語をいふ。

秀吉關白となる。　影は形に從ふ。

右の例に於て　秀吉　影は　は主語、なる　從ふ　は自動詞の

説明語であるけれど、「秀吉なる。」「影は從ふ。」といつたばかりでは意味が明白でない、更に　關白と　形に　などいふ語を加へる必要がある。而して　關白と　形に　は他動詞の目的を示す語ではない、從つて客語ではなくて補語である。又、

　　艱難汝を玉にす。　落武者芒を敵とあやまる。

の文に於て　艱難　落武者　は主語、汝を　芒を　は客語、す　あやまる　は説明語である。されど、「艱難汝をす。」「落武者芒をあやまる。」　といつたばかりでは、文意がまだ明白でない。更に　玉に　敵と　などいふ語を加へる必要がある。而して玉に　敵と　は他動詞　す　あやまる　の目的物ではない、隨つて客語ではなくて補語である。

補語の成立

◎補語は名詞・代名詞から成り、前例の　に　と　の外になほ　の　を　して　より　等の助詞がつくこともある。

月光、鏡のごとし。

壯烈、鬼神を泣かしむ。

賴朝義經をして平氏を討たしむ。

優等生、學校より賞品を受く。

◎形容詞が説明語になつてゐる文にも亦補語を要するものがある。次の文の　乙に　白絲と　は卽ちそれである。

　　甲は乙に等し。　　心は白絲と同じ。

◎指定の助動詞　なり　たり　及び助詞　ぞ　か　などの説明語となつた文は、上に名詞・代名詞を加へねばならぬ。而して此の加へられた名詞・代名詞は何れも補語である。

　　秀吉は英雄なり。　　汝は汝たり

今日は何日(なる)か。　汝は誰(なる)ぞ。

修飾語

主語・說明語・客語・補語の外、なほ文の組立に用ひられる語がある。主として文の意味をくはしくする爲に用ひる。之を**修飾語**といふ。

白き犬走る。　風景頗るよし。

春風櫻の花を散らす。　母泣く兒に乳を呑ます。

右の例に於て　白き　は主語　犬　にかゝり、頗る　は說明語よし　にかゝり、櫻の　は客語　花を　にかゝり、泣く　は補語　兒に　にかゝつて、それ〴〵かゝつた語の意味を詳しくしてゐる。此等は何れも修飾語である。

◎主語・客語・補語の修飾語は、形容詞・動詞の連體形、動詞・名詞に結びついた助動詞の連體形、若しくは助詞　の　が　を伴つた名詞・代名詞等で、說明語の修飾語は、主として副詞である。なほ次の例を見よ。

わが軍優勢なる敵を破る。　父、財產を小さき子に讓る。

鳥、枯れたる枝に止れり。

◎文の成分は主語・客語・補語・說明語及びそれ〴〵の修飾語である。而して主語・客語・補語・說明語にそれ〴〵の修飾語を加へて、**主部・客部・補部・說明部**といふ。又、主部に對して、他の三部を總稱して**叙述部**ともいふ。

- 主部
  - 主
  - 主の修
- 叙述部
  - 客部
    - 客
    - 客の修
  - 補部
    - 補
    - 補の修
  - 說明部
    - 說
    - 說の修

次の文を各成分に分解せよ。

(イ)教師、生徒に宿題を課せり。

(ロ)鯨は哺乳獸なり。

(ハ)巧遲は拙速に如かず。

(ニ)父、太郎をして次郎に書を教へしむ。
(ホ)冬の夜の月は、此の上なく寒し。
(ヘ)活潑なる精神は、常に健康なる身體に宿る。
(ト)燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんや。
(チ)突然吹きちぎられた濃霧の一塊が彼を包んだ。(ロ)
(リ)船の中の人は思はず足を立てんばかりに總立ちになつた。(ロ)

第十一章　文の成分の排列及び省略

常の位置

成分排列の常の位置

文の成分はこれを排列するに略〻一定の順序がある。

花(主)　咲く(説)。
影(主)　形に(補)　從ふ(説)。
孝子(主)　日を(客)　愛す(説)。

成分排列の一般法則

校長(主)　優等生に(補)　賞品を(客)　與ふ(説)。
校長(主)　賞品を(客)　優等生に(補)　與ふ(説)。
砲聲(主)　絶えず(説の修)　轟く(説)。
我が(主の修)　軍(主)　大いに(説の修)　敵の(客の修)　精兵を(客)　破る(説)。
父(主)　終に(説の修)　鉅萬の(客の修)　財産を(客)　その(補の修)　子に(補)　讓る(説)。

前例によつて、成分排列の順序は左の如くなることが分る。

一、主語は上。
二、説明語は下。
三、客語・補語はその中。但し補語は客語の下又は上。
四、修飾語は修飾される語の上。但し、説明語の修飾語は主語のすぐ下。

成分の倒置

成文の倒置　語調を整へ、又は語勢を強める等の必要から、わざと成分の位置を變へることがある。

甲、主語と説明語とを倒置したもの。

咲け（説）花（主）よ。　善いかな（説）言（主）や。

乙、客語を首位に置いたもの。

かゝる（客）放言を　誰かは（主）信ぜむ（説）。

そんなことを（客）あなたは（主）誰に（補）お聞きでしたか（説）。

丙、補語を首位に置いたもの。

正直の頭に（補）神（主）宿る（説）。

親のいひつけには（補）子たるものは（主）從はねばなりませぬ（説）。

丁、客語と説明語とを倒置したもの。

成分の省略

祝へ（説）　我が君を（客）。

誰か（主）　知らん（説）　烏の雌雄を（客）。

◎詩歌には成分の倒置されてゐるものが極めて多い。

成分の省略　文の成分は、それ〴〵一定の職分があるから濫に加除すべきものではない。しかし、思想の明瞭と確實とを缺かない限りは、文を簡潔にし語勢を強くするために、其の中の或成分を省略することが出來る。

甲、主語を省略したもの。

（余は）明日君を訪はむ。

（世人）鶯を春告鳥といふ。

◎命令・禁止の文には主語の省略されたものが殊に多い。

（汝等）前へ進め。（人々）こゝに塵を捨つべからず。

乙、説明語を省略したもの。

その理由はいかに。（あらん）。

千里の道も一歩より。（始まる）。

あなたはどちらへ。（いらつしやいますか）。

はい（私は）大阪まで。（まゐります）。

丙、客語を省略したもの。

余は少しも（それを）知らざりき。

終日（彼を）待てども、終に來らず。

丁、補語を省略したもの。

校長、卒業證書を（卒業生に）授く。

卒業證書授與式は、昨日（學校で）擧行された。

次の文の排列を常の順序に改めよ。

（イ）仰げば尊し、我が師の恩。

（ロ）たゆまず學べ、時の間も。

（ハ）やよ正行、忘れたるか、父の遺訓を。

（ニ）降る雪に、きこりの道もうもれけり。

（ホ）たれかあはれと聞かざらん、あはれ血に泣くその聲を。

（ヘ）雲のいづこに月宿るらむ。

（ト）短蓑直ちに入る虎狼の窟、一匕深く探る蛟鰐の淵。（悅子高信）

（チ）誰かいふ、狹くして且陋なりと。

（リ）謂ふことなかれ、今日學ばずとも明日ありと。

（ヌ）愉快だつたね、ほんたうに、昨日の遠足は。

（ル）今日有益な御話を私は先生にうかゞひした。

次の文の中の省略された語を補へ。

（イ）柳は綠、花は紅。

（ロ）やがて十二時ですから、たべてから出かけませう。

（ハ）もうおかへりですか。どうかごきげんよく。

(ニ)皇族下乗。

(ホ)樂書無用。

次の文に於て、差支ない限り成分を省略せよ。

(イ)中江藤樹は俗名は與右衛門といひ、近江の人なり。その德行世に類なかりければ、世人その人を呼んで近江聖人といへり。

(ロ)花をちらす風のやどりを誰、たれか知る。若しこれを知る人あらば、願はくはわれに教へよ。われ、そのやどりにゆきて、風にうらみむ。(三十一字の短歌に約めよ。)

第十二章　節

「花散る。」「蝶舞ふ。」「風吹く。」「雪降る。」「香が高い。」「滿は損を招く。」「謙は益を受く。」などは何れも主語・客語・補語・說明語等から成る完全な文である。けれども、

花の散るは蝶の舞ふに似たり。

風の吹く音、すさまじ。

雪降れば、木毎に花ぞ咲きにける。

梅の花は香が高い。(ロ)

滿は損を招き、謙は益を受く。

のやうに用ひられたときは、大きな文の一部分となつてその獨立を失ふ。かやうに、文がその獨立を失つて他の文の一部分となつたものを節といふ。

節は之を大別して次の五種とする。

體言節　文中にあつて體言の用をなす節をいふ。次の「花の散る」(主語の用をなす。)「蝶の舞ふ」(補語の用をなす。)「身體の健康なる」(客語の用をなす。)などは、即ち是である。

體言節

連體節

花の散るは蝶の舞ふに似たり。

誰か身體の健康なるを欲せざらむ。

連體節　文中にあつて他の體言を修飾する用をなす節をいふ。

次の「風の吹く」（主語音を形容する。）「雪降る」（補語野邊を修飾する。）「花咲く」（客語春を修飾する。）などは、卽ち是である。

風の吹く音、すさまじ。

余は終日雪降る野邊にさまよひぬ。

雁は花咲く春を見すてゝ歸りぬ。

連用節

連用節　文中にあつて說明語たる用言を修飾する用をなす節をいふ。次の「雪降れば」「家は貧しけれど」などは、卽ち是である。

雪降れば、木每に花ぞ咲きにける。

家は貧しけれど、慈善の心いと篤し。

用言節

小主語

總主語

對立節

附屬節

用言節　文中にあつて說明語たる用言の用をなす節をいふ。

次の「香が高い」「波靜かなり」などは、卽ち是である。

梅の花は、香が高い。　瀨戸內海は、波靜かなり。

◎かやうな場合には、說明語中の主語「香が」「波」を**小主語**といひ、「梅の花は」「瀨戸內海は」を**總主語**といふ。

對立節　文中の各節が互に相對立して、全く同等の價値を有する節をいふ。次の各節などは卽ち是である。

花笑ひ、鳥歌ふ。

富は屋を潤し、德は身を潤す。

水は方圓の器に隨ひ、人は善惡の友に因る。

◎此の對立節に對して、他の四つの節を**附屬節**と總稱することがある。

次の文に於ける節を擇び出し、且、その種類を示せ。

(イ)花咲く春はいと樂し。
(ロ)山高く、水長し。
(ハ)前車の覆るは、後車の戒なり。
(ニ)國運、旭の昇るに似たり。
(ホ)たれか光陰の疾く過ぐるを惜まざらん。
(ヘ)水清ければ大魚なし。
(ト)仁者はいのち長し。
(チ)動物の中で、猿ほど人に似てゐるものはない。
(リ)子曰く、剛毅朴訥は仁に近しと。
(ヌ)豹は死して皮を留め、人は死して名を留む。
(ル)爲朝矢二つ三つ放さば、夜の明けざる中に勝負は決すべし。

第十三章　文の構造上の分類

文はその構造の上から之を單文・複文・重文の三種に分ける。

單文　節を含まぬ文をいふ。

山、高し。
秋風、衣を撲つ。
鳥、籠の中に在り。
父、財産をその子に讓る。
わが海軍、大いに露國の艦隊を日本海に破る。

◎主語・客語・補語・修飾語・說明語を重ねた場合でも、節を含まない限りは皆單文である。

屋根も(主)庇も(主)手水鉢も(主)處として落葉ならぬはなし。
菅公は才と(客)學と(客)德とを(客)兼ね備へたり。
私は幼い時、父にも(補)母にも(補)兄弟にも(補)死に別れました。(口)
我が日本人は清く(修)直く(修)猛き(修)心を持てり。

楠木正行は忠臣にして且孝子なり。
（説）（説）

◎「仁者は命長し。」「梅の花は香が高い。」の如きは節を含んでゐるけれど、この「命長し。」「香が高い。」は、總主語たる　仁者は　梅の花は　に對すれば單純な説明語の用をなすに過ぎぬ。故に用言節を含む文はなほ之を單文の内に加へる。

複文　體言節・連體節・連用節を含んでゐる文をいふ。

花の散るは、蝶の舞ふに似たり。
（體言節）（連體節）

余は終日蟲鳴く野邊にさまよひぬ。
（連體節）

雪降れば、木毎に花ぞ咲きにける。
（連用節）

重文　二つ以上の對立節から成る文をいふ。

梅は香高く、櫻は色美し。

複文

重文

君は遠く去り、僕は永く留まる。

吉野山は花に宜しく、龍田川は紅葉によろし。

月明に、星稀に、烏鵲南に飛ぶ。

文は、單文・複文・重文の三種に分れるとはいふものゝ、時としては頗る複雑なものがある。今、二三の例を次に示さう。

我が國には山紫に水明かなる佳景多し。（重文を含む複文）
（連體節（重文）　對立節　對立節）

氣霽れては風新柳の髪を梳り、氷消えては波舊苔の鬚を洗ふ。（複文二つから成る重文）
（連用節　複文（對立節）　連用節　複文（對立節））

土裂けて水涌き上り、巖われて谷にまろび入り、
（連用節　複文（對立節）　單文（對立節））

渚こぐ舟は波に漂ひ、道行く駒は足のたちどをまどはせり。（複文一つと單文三つとから成る重文）
（單文（對立節）　單文（對立節））

次の文をその構造上から分類せよ

(イ)十五夜の月、皎々として清き光を放ちぬ。

(ロ)衣は骨に至り、袖は腕に至る。

(ハ)山は高けれど限りあり、海は深けれどそこひあり。

(ニ)君子は人の己を知らざるを憂へず。

(ホ)山寺の鐘遠く聞えて、秋の日は山の端に入りぬ。

(ヘ)雪は野山をうづむとも、老いたる馬ぞ道は知る。

(ト)山は裂け海はあせなん世なりとも、君に二心わがあらめやも。

第十四章　文の性質上の分類

文はその性質上から、之を敍述文・疑問文・命令文・感歎文の四種に分けることが出來る。

敍述文　事實をありのまゝに敍述する文で、文の最も普通な形

である。此の種の文には肯定を表すもの、否定を表すもの、推量を表すものなど、色々ある。

健康は至寶なり。(肯定)

身修まれば、家齊ふ。(肯定)

去年今夜清涼に侍りき。(肯定)

水清ければ大魚なし。(否定)

春は來れども花咲かず。(否定)

兩三日の中に花も咲くべし。(推量)

花咲かば、鶯來鳴かむ。(推量)

都合あしくとも約束を違へじ。(推量否定)

彼に限りて、さる悖德の行爲はあるまじ。(推量否定)

疑問文　自ら疑ひ又は人に問ふ意を表す文をいふ。

わが思ふ人はありや、なしや。

春や疾き、花や遲き。

桃と櫻と何れか美しき。

榮枯は夢か、幻か。

汝は誰ぞ。　そを何處にか負ひて行く。

◎前例のやうに疑問文には多く　や　か　又は　ぞ　を添へる。但し、上に　何處　何れ　などの疑の語があるときは、や　か　を省いてもよい。

雲の何處に月宿るらむ。

何れを花とわきて折らまし。

◎反語の文は、形は疑問で、其の意は斷定である。今は暫くその形の上から之を疑問文の中に加へる。

◎や　か　やは　かは　を含んでゐる反語の例は、已に本篇第八章に掲げたから之を省き、こゝにはたゞ　ぞ　を含んだ反語の例を次に示さう。

いかにぞ之を知らん。　何ぞ意に介するに足らん。

命令文

命令文　要求、希望を言ひ表す文をいふ。此の種の文には「かくせよ。」と正面から命令するものと、「かくするなかれ。」と反面から命令(卽ち禁止)するものとある。

鳴け鳥よ。

朝は早く起きよ。

兄弟姉妹は仲むつまじかれ。

よく學び、よく遊ぶべし。

空しく光陰を費すなかれ。

無用の者入るべからず。

感歎文

あるじなしとて春を忘るな。
かひなき事をな思ひそ。

感歎文　強い感動を表す文をいふ。

嗚呼、天道の無情一に茲に至るや。
あはれ、此の殿は大剛の人かな。
やあ、よくやつて來てくれたな。(口)

◎感歎文は通例　嗚呼　あはれ　やあ　かな　や　よな　等の感動詞を含む。

◎感動詞中　いざ　いで　のやうに單に發語の意を示すもの、若しくは　かし　のやうに單に念を推し意を強める意に用ひるものなどを含んでゐるだけの文は、普通の敍述文又は命令文で、感歎文ではない。

文はかやうにその性質の上から四種に分類するけれども、實際は、

一文中に二種以上の文を含んでゐる場合が多い。

次の文をその性質の上から分類せよ。

(イ)人の一生は重き荷を負うて遠き道を行くが如し。急ぐべからず。
(ロ)あつぱれの馬や、名馬や、何者の馬ぞと褒めたまふこと大方ならず。
(ハ)痛はしや、美しき都上臈の、今のうちに灰土とならせたまはん事の無慙さよ。
(ニ)あなあさまし。人もこそ聞け。いかに和上臈たち夜もふけぬるにさやうにはおはするぞ。とく〳〵入らせたまへ。
(ホ)君が人生の毀譽を度外に置き、天下後世の議論を顧みざるもの故なきにあらず。嗚呼君の心事誠に悲しからずや。然れども、事已にこゝに至る。之をいふも何の益かあらん。
(ヘ)あはれ此の殿は大剛の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く人一人もおはしまさゞりつるに、しいだしたる事よ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず、あはれ、この人を大將として合戰せば、いかばかりか頼もしからん。

第十五章　文の結法附係結

文の結法には種々の形式がある。

一、終止形で結ぶもの

終止形で結ぶ文

動詞・形容詞・助動詞の終止形で文を結ぶのは、文の最も普通な形である。

猿も木より落つ。

善を爲すこと最も樂し。

光陰は矢のごとし。

父は父たり、子は子たり。

◎「弘法も筆の誤。」「勉强は幸福の母。」「柳は綠、花は紅。」「君は君、臣は臣。」などのやうに、名詞で結んだやうに見えるものは何れも下に來るべき助

連體形で結ぶ文

動詞の終止形　なり　又は　たり　を省いたものである。

二、連體形で結ぶもの

ぞ　や　か　なむ　等の助詞が文の上に添はつてゐるときは、下を動詞・助動詞・形容詞の連體形で結ぶ。

家ぞ　なむ　榮ゆる。

光ぞ　なむ　見ゆる。

名ぞ　なむ　芳ばしき

明くる。

夜や　明けぬる。

遲き。

誰か　ある。

知るべき。

賢き。

ぞ・なむ・や・かの係結

かやうに用ひた　ぞ　なむ　や　か　を指して　ぞ　なむ　や　か　の係といひ、下なる連體形の語を指して　ぞ　なむ　や　か　の結といふ。

◎「名を天下に揚げたりとぞ。」「終に善人となりたりとなむ。」「君の文にや。」「如何なる罪にか。」のやうに　ぞ　なむ　や　か　で言ひすてたやうに見える語は、下に來るべき連體形の語　いふ　聞く　あらん　などを省いたものである。

已然形で結ぶ文

三、已然形で結ぶもの

こそ　の助詞が上に添はつゐるときは、下を動詞・助動詞・形容詞の已然形で結ぶ。

家こそ榮ゆれ。　夜こそ明けぬれ。　名こそ芳しけれ。

こそ係結

かやうに用ひた　こそ　を指して　こそ　の係といひ、下なる已然形の語を　こそ　の結といふ。

◎「感ずべきことにこそ。」のごとく　こそ　で言ひすてたやうに見える語は、下に來るべき已然形の語　あれ　ありけれ　等を省いたものである。

命令形で結ぶ文

◎「心知りの友どちなむ別れ難く思ひて、しきりに訪ひ來。」「われこそ見送に行くべかりしを、え果ざりけり。」などのやうに、結となるべき用言を言ひ切らないで下につゞけることがある。かやうな場合には、係に對する結は自然に隱れてしまふ。

◎係に對して結ぶべき位置は一定してゐるから、他の處で誤り結んではならぬ。次の文などは何れもその結び方を誤つてゐる。

この時こそと思ひたれ。　菊の花は今ぞ盛と告げこしける。

四、命令形で結ぶもの

文には動詞・助動詞の命令形で結んだものがある。

急がばまはれ。

疾く行きね。

下女に庭を掃かしめよ。

五、助詞又は感動詞で結ぶもの

助詞で結ぶ文

文には又助詞又は感動詞で結んだものがある。

甲、疑問の助詞又は指定の助詞で結ぶもの。

君は今日運動會を見給へりや否や。

進まうか、それとも退かうか。（口）

大和魂、そは何ぞ。

◎この　ぞ　を係の　ぞ　で下に連體形の結を省いたものと混同してならぬ。

感動詞で結ぶ文

乙、感動詞で結ぶもの。

あなおもしろの春雨や。

あゝ盛なるかな。

感心な心懸でございますな。（口）

次の文の結法並に係結を説明せよ。

(イ)精神一到せば、何事か成らざらむ。

(ロ)柿本人麻呂なむ歌の聖なりける。

(ハ)民をおもほす御心に、大御衣やぬがせたまひし。

(ニ)兵の「こゝにこそ」といはんずる一言をぞ待たせたまひける。

(ホ)昨日こそ早苗とりしか、いつのまに稻葉そよぎて秋風の吹く。

(ヘ)世の中は何か常なる飛鳥川、昨日の淵ぞ今日は瀬になる。

(ト)花橘は名にこそ負へれ、猶梅の匂にぞ、いにしへの事も立返り、戀しう思ひ出でらるゝ。

(チ)「恐し〳〵、鬼も子を生むにや。鬼の子は如何なるものにか。」とて、物越しに人見たりしに、その親の鬼ならば、さこそはあらめ。

(リ)光範より賜はせける刀は、ありし有樣をくはしく書き添へて返しけりとかや。いとあはれなる事にこそ。

(ヌ)文覺佐殿に故下野殿の御首を進らせつゝ、「國こそ多く、處こそ廣きに、當國へしも流されけるは、さるべき佐殿の骸にも見參したまふべき事にやとあはれにこそ候へ。」とて、はら〳〵と泣きけり。

(ル)今の帝、亦天照大神よりこの方の正統を受けまし〳〵ぬれば、この御光に爭ひ奉るものやはあるべき。なか〳〵かくてしづまるべき時の運とぞ覺ゆる。

國文法綱要 終

大正十四年三月七日
文部省檢定濟

大正十三年十二月二十日印刷
大正十三年十二月廿三日發行
大正十四年三月一日訂正再版印刷
大正十四年三月四日訂正再版發行

定價金四拾六錢
大正十六年度臨時定價金七拾八錢

著作者　東京市小石川區高田老松町五十二番地　吉田彌平
著作者　東京市小石川區小日向臺町二丁目四番地　小山左文二
發行兼印刷者　東京市神田區通神保町六番地　上原才一郎
發行所　東京市神田區通神保町六番地　光風館書店（電話神田三〇八七番　振替口座東京三二七番）

著作權所有

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候

國文法綱要

（東京秀英舍印刷）

師範學校　中學校　實業學校

各學校教科用書

師範國文　東京高等師範學校教授　吉田彌平編　新版　一部用全十冊

國文教科書　師範學校　本科用全六冊　二部用全一冊

國文教科書　中學　東京實業學校教授　國學院大學講師　文學博士　高野辰之編　修正十七版　全拾冊

國文讀本　實業學校　東京高等師範學校教授　東京帝國大學部助教授　文學士　保科孝一編　初版　全十冊

國語教科書　實業學校　修正五版　全八冊

日本文典　師範學校　東京高等師範學校教授　吉田彌平・小山左文二共著　修正再版　全一冊

國文法綱要　東京高等師範學校教授　吉田彌平著　修正再版　全一冊

日本文典　中學　修正七版　全二冊

日本文典　光風館編輯所編　簡明　修正六版　全一冊

現代文新鈔　東京高等師範學校教授　吉田彌平編　修正五版　全五冊

近世文新鈔　訂正再版　全一冊

近古文新鈔　訂正再版　全二冊

增鏡鈔本　光風館編輯所編　訂正再版　全一冊

現代文鑒　訂正再版　全二冊

徒然草鈔本　東京高等師範學校教授　文學博士　中村久四郎編　訂正三版　全一冊

漢文教科書　師範學校　修正八版　全四冊

漢文教科書　中學　文學博士　井上哲次郎編　修正四版　全五冊

漢文教科書　女子　東京高等師範學校教授　文學博士　兒島獻吉郎編　修正再版　全四冊

日本外史鈔本　修正再版　全一冊

十八史略鈔本　修正再版　全一冊

論孟鈔本　修正再版　全一冊

広島大学図書
2000052424